
そんなもの認めない

ZIO

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そんなもの認めない

【Nコード】

N7290I

【作者名】

ZIO

【あらすじ】

とある関西人と、正義の味方が交わる。その舞台がなんとリリカルなのはの世界だった！

彼らにどんなストーリーが待ちうけているのか！そして彼らはどんな答えを導くのだろうか…。

プロローグ（前書き）

どうもZEOです。

初めて書くのでまだまだいたらない点はあるますが、出来るだけ優しく見守ってください。

プロローグ

「ああ〜なんとも言えん話やったなあ〜」そんな事を言っている関西弁の男は達成感が溢れた顔でいた。

俺の名前は、大和 洋介。大阪で平凡な日々を過ごしている。そんな俺が何をしていたかと言うと、『Fate/stay night』というゲームを一応、一通りクリアした所や。

彼はその作品で出てくるある1人の『正義の味方』について考えていた。俺はそのキャラにある感情を抱いた。『救ってやりたいと。』こんな彼の結末を認めてやる事は出来ひんかった。

しかし所詮はリアルの話ではない、作られた話だ。

「ってか俺いつからこんなええ事考える人になったんや！俺らしくないわっ！」と考えてこの事は頭の隅に追いやった。

「タバコでも吸うてまた違う作品に没頭させよ……ってないやんっ！しゃあない、近くのコンビニにいきますか。」俺はいつも通り徒歩7分という中途半端に近いコンビニに行く事にした。そのコンビニに行く途中で横断歩道を渡るんだが、そこはめんどくさいからいつも通りに道路を渡ってショートカット！

このいつも通りの行動に後悔するのは、遅くなかった。

ありえへん速度でスピード無視する車が横の視界に入った。

これはヤバイ。そう思った矢先に激しい衝撃とグルグル廻る視界に移り変わり何時の間にか意識が消え去った。

第1話 開眼と出会い（前書き）

主人公にあの能力がついちやいます。
グダグダでゴメンナサイ。

第1話 開眼と出会い

「んっ……」意識が蘇ってくる。

「あれっ確かコンビニ行く途中で……あっ」

確か俺車にひかれて…死んだっばいよな？いや冷静に考えよう。関西人のクセにクールな考えができるのが俺のええところや。身体を起こし、深呼吸して自分を落ち着かす。まずは状況を確認せなあかな。

周りを見てみよう。

「木しかないやんっ！」一人でツツコム余裕があるから心の方に余裕は少しあるみたいやな。

そもそも何故真夜中のコンビニの道中からこんな真っ昼間の森に移動したのかは理解出来ひん。せめて、近くに町とかあれば…

「うっ…」

後ろの方から声が聞こえる音の方を見ると赤い人が見えた。

「……なんやろな？」

取り敢えずそれを確認するためにその場所に向かった。

「えっ…。」

人やった。

それはまだいい。

その人物に問題があつた。

赤い。

赤いではない。紅い。

それは血だまりやった。

一瞬呆けてしまったが、俺は少々こういった事にはほんの少し耐性がありすぐに駆け寄つた。

言葉で表すなら間違いなく重傷だと思つた。だが思つてた以上のケガではなく、意識も一応ある。

取り敢えず応急処置として自分の着ていたシャツを破り止血する。

「何でこんなところに……」疑問は山ほどあるけど今はそんな余裕はない。

ふと顔を見た所で今度こそ俺の冷静さが完璧に無くなった。その人物はさつき会つた、いや画面の中に存在してた人物だった。

「衛宮……士郎」

救ってやりたいと思った『正義の味方』がいた。

s i d e 士郎

ボロボロだった。

正義の味方になるために、暖かい日常、大切な人達を捨て自ら戦火に身を投じた。

1から10まで救い出したいと願った理想論。

現実には1を切り捨て、9を救う事しか出来なかった。

救った人に裏切られた事もあった。

いくら救えなかった人達に恨まれようとも、封印指定され執行者に追われる日々が続こうとも、それでも彼は10を追い求めた。

「これまでか……」

彼の赤い髪は色素がぬけ白髪、肌は褐色。

かつて出会った赤い弓兵のように姿が似てきた。いや瓜二つだ。

「1から9までしか救えず、正義の味方がもう終わるのは少し残念だけど…俺頑張ったかな？オヤジ…」

そして愛しい人の顔が浮かぶ。

「セイバー、俺はこんな所で倒れてしまっけど後悔はない。辛い事もあったけど、助けた人たちから笑顔をもらった。俺はアーチャーみたいなにはならないから安心してくれ。」

意識を離れつつある中で声が聞こえた。

「かわいい弟子の頼みで。お主を救ってやろう。それにワシはお主に興味を持った。今から別次元に飛ばす。そこで答えを求めるとよい。あと弟子からの伝言じゃ、幸せになれ。らしいわい。」

宝石翁の宝石剣が光り輝いた。

声がなくなり士郎は意識を失った。

間違いない。

この白髪この肌、そして身に纏う聖骸布が彼であることを証明していた。

どれくらい時間がたっただろう。彼はようやく冷静さを取り戻した。

「どうなってるんや……まさかパラレルワールドか？それともどこぞのトリップか？……衛宮士郎がおる時点で俺のおった世界じゃあないのは確定っぽいな。」

ふと考え込んでいると、頭に激痛が走った。

「がっ……！」

痛いなんて生易しいモノではない。

脳が内部から沸騰しているような痛み。

イタイ

イタイ

イタイ

イタイ

イタイ

イタイ

気が狂いそうになった。

そして視界に異変が起きる。

世界が変わった。

ツギハギの世界

「な…んで…」

彼はこの景色を理解した。この世界が死で満たされたコトに。

この力があの作品だけのモノとってた。

しかし何故自分に？

しかし思考するのも限界だった。

そして意識が闇におちた。

side ????

「グラナガン南西部の外れに転移反応確認しました！」

オペレーターらしき人物が声を上げる。

栗色の髪で後ろの部分を切りそろえた髪型が特徴で顔には若干幼さが見える女性が指示を出す。

「ロストログアの反応は？」

「ありません。」

オペレーターが答える。しかし答えた直後に驚いた顔をする。

「！！先ほどの反応があつた場所とほぼ同じ座標で、また転移反応があります！」

「どういう事や？なにせよ確認するしかないな。フェイトちゃんとシグナムに連絡して、偵察してもらて！」

「了解！」

side フェイト

空を飛んでいる二人の女性が見える。

「テストロッサ、どう思う？」

桜色の髪をポニーテールでまとめ、甲冑を纏う女性が金髪のツインテールをし、黒い服に身を纏う女性に話しかける。

「よくわからない…かな。レリック絡みの可能性はあるから油断は出来ないね。」

テストロッサという女性は彼女が思った疑問を理解し答える。

「ふむ、そうだな。」

とポニーテールの女性が短く答え二人は現地へと向かう。

「この辺りなだけどな…！シグナム！！見つけた！」

私はすぐにシグナムに呼びかけ二人の人物が倒れている場所に向かう。

黒い髪をした男性と白髪の髪の男性がいた。

白髪の男性の方で血だまりを見た瞬間、怪我をしてると気付いた。

「怪我をしてるな。何があつたんだ？」

とシグナムも駆けつけ声を掛ける。

「とりあえず応急処置はされているし怪我也見た目よりか酷くはないみたい。二人を六課に運ぼう。」

「そうだな。意識が戻ってから、詳しい話を聞けばいい。」

と結論をつけ、2人は機動六課へと帰還した。

第1話 開眼と出会い（後書き）

主人公に直視の魔眼がついちゃいました。

かなり無理しちゃいましたね。汗

だからといって月姫は出ないのであしからず。

第2話 関西人の友達は正義の味方！（前書き）

今回もグダグダです。汗前書きにオリキャラの紹介を少しします。

大和 洋介 二十歳

身長 175cm 体重 58kg

趣味 タバコ ギャンブル人間観察 微妙なツツコミ

特技 喋る事と案外ポーカーフエイス

一応主人公。

楽天家で自分がかわいくだらしないと思われてる。しかしやる時はやる男。過去にあった出来事で何かあったらしく心が壊れた。

今はこんなところです。

詳細は徐々にわかります。

第2話 関西人の友達は正義の味方！

「うつ…」

目が覚める。

そして辺りを見渡す。なんか機械があつたり、薬の匂いが鼻に付く。となりのベッドには正義の味方が眠ってる。

どうやら医務室のようだ。誰かが助けてくれたらしい。そこでようやく倒れたいきさつを思い出す。

「ってか俺、目がおかしくなつて倒れた筈……っ！」

と同時にまたもや視界がツギハギだらけの景色に変わり頭が痛くなる。

これはあの魔眼に違いな俺の本能がそう言ってる。

この状態はキツイ。どうにか制御できひんのか？

とりあえず、痛みをこらえて、ツギハギがなくなつた景色を思い浮かべ眼を閉じ集中する。

「あれっ？ホンマにおさまってるやんっ！俺ってやればできる子やってんなあ〜」

自画自賛してしもうた。いやいや、ってかなんでこんな眼があんねん！

心の中でツツコム。我ながら素晴らしい早さのツツコミや。

ボケてる場合ちゃう。よく考える俺。これは月姫みたらわかる。あのツギハギの景色といい間違いない。

『直死の魔眼』

ほんまにあつたんか。

まてよ…確かこの眼は死を理解せなあかん筈や。……って事は一回死んだ？

………

………

………

………

………

…

んなアホなっ！！

まだ二十歳で死ぬなんて悲しすぎてシャレにならんへんっ！

この体どうなってるんやろ？

たぶん制御、出来たけど発動出来るのかな？…

次はツギハギだらけの世界をイメージして集中する。

………

………

………

…

「なんも変わつとらん…」

制御出来てないやん！

さっきのは偶然？

何ちゅう中途半端な力や。まああんな力使いたくないしな。

この件は保留確定。

ここで隣の正義の味方の存在を思いだす。

まだ意識はないようだ。

まさか目の前に存在してるとは今でも信じられへん。でも確かに存在してる。

救ってやりたいと思ってた。あんな結末認められへんかった。

でも展開が急すぎるわ！今は自分がこの後どうなっていくかが問題や。状況がわかって自分に余裕が出来てから。土郎事は考えよう。ってかその前に仲良くならなあかな。あとは俺が知っている事を話すかどうか決めとかな…

と考えこんでると、とうとう正義の味方が目を覚ました。

「…っ、ここは…」

とりあえず声掛けるか。

「おはようさん。俺の名前は太和洋介よろし頼むわ。」

気軽に言っついでに名乗ってみた。

「私の名前は衛宮士郎。士郎と呼んでもらえたら助かる。ちなみここはどこだ？」

微妙に警戒されてるな。弓兵の喋り方になってる。

「じゃあ士郎って呼ばせてもらうわ。俺の事は洋介でええで。ここはどこかわからん。急に森の中におつて士郎をみつけて応急処置してから俺もその後で気分悪くなつて気失つて、目覚めたらここつてワケや。」ここは正直に答えた。

「では洋介と呼ばせてもらおう。それと手当ての事は感謝する。ところで何者だ？魔力を感じる。魔術師か？」

えっ、俺魔力あんの？

もしかして魔術回路百本ぐらいあるんちゃう？できる子ですから。しかし魔眼？もあるしどんなスペックや！？

何て言おうか……士郎には悪いけどすこし嘘をつく。

「俺は魔術師やない。魔術師の事は知つとるけど一般人や。魔力あんののは正直知らなかった。ちなみに知つとる理由はオトンが裏の情報屋やつとるからや。」

最初の部分は本当、後半は全部嘘。

「では私の事もしっているのか？」やや睨みつけながらいってきた。メツチャ怖い！

でも平然を装って話しかける。

「勿論知つとる。封印指定の事とかな。俺はそんなんでもええ事やけど。第一魔術師の考え方は好かん。」

士郎は結構 Fate の中でも魔術師という在り方を好んでなかったからな。これでいける筈…

「ほう。なかなか面白い考え方をするな。」

喋り方がすこし柔らかくなつたのを感じる。

「そうか？人の考え方なんか人それぞれやろ。それより士郎、友達にならへんか？」

話を180度変えてストレートにいつてみた。強引すぎるか？まあえっか。この気持ちはホンマやし嘘偽りはない。

「はっ？なんでさ？」

生で聞いたら少し感動する。

「なんや乏しいリアクションやな。笑いのセンスがなつとらん！」

「君は本気で言ってるのか？見ず知らずの俺に友達になってくれとは正気かっ？」

「見ず知らずの人と友達になんのはアカン事なんか？そんなんやつたら友達出来ひんぞ？」

「はあ…わかったよ。宜しく頼むよ洋介。」

「ふむ。宜しく頼まれた士郎。」

そしてお互いがどうしてこうなったかのいきさつを話合った。

「車にひかれたらいつの間にか来てたと。洋介は幸運Eか？」

「なんやろ？それ士郎にだけは言われなくなかったわ。」確かに幸運Eの士郎になんかは言われたくない。

その前に先ほどの会話で嘘をついた理由には今更だがいくつかワケがある。

理由は俺が別世界から来たと言うことだ。別世界から来ただけだったらしいが、その世界に問題ありだ。

一つは魔術の事だ。俺の世界では当たり前だが魔術の概念はない。その事を言ったら士郎は俺をただの一般人と見られてしまう。別にそれでも問題はないんだが、魔術を知っている方が何かと都合がいい話が何かとスムーズになる。

もう一つは士郎の事だ。もし正直に士郎の事をほとんど知ってます。って言ったらアタマおかしい人やん！しかも知つとる理由が、聖杯戦争の出来事が俺の世界ではゲームになって大ヒットしました！なんて言った暁には、確実にエクスカリバー喰らってバットエンド確定や！

嘘は士郎が気付くまでは言いたくない。ある程度の事はゲームやっただけだし、話を合わせる自信はかなりある。だからあえて士郎と同じ世界の人間だということにした。まあ他にも理由はあるけど

今はめんどくさいからパスや。

士郎には情報屋で入った情報と言って士郎の過去は多少、知ってる
と言う事を話した。

聖杯戦争の事や衛宮切嗣の事だ。後は正義の味方的な事を目指して
るのかと遠回しに聞いた。

そしたら俺は正義の味方を目指してると馬鹿正直に言ってきた。だ
から俺も軽く言ってやった。

「士郎、カッコイイ夢持つとるやないか。でも士郎には味方がおら
んことになってしまふ。しょうがないから俺が士郎の味方になつた
るわ。全然役に立たんけどな。」

「ありがとう。」

短い答えだか満足した。今はこれでいい。
信頼関係がお互いに築いた後で真剣に話せばいい。

あつ俺には男の趣味があると思ったやつは気合いと言う名の投影で
ゲイボルクで刺すからな。
俺は健全な男子や！

つと考えてたらドアが開く音が聞こえた。

「あら、目が覚めたのね。大丈夫？」こちらに歩みよってくる女性
が2人いた。声を掛けた方を見た。

見た目は金髪で白衣を纏っている。年齢はすこし年上ぐらいで綺麗

な顔をしてる。

どっかでみた事あるなあ……。

もう1人も金髪で髪は長い。制服のような物を着ている。スタイルもかなりいい。顔は……

固まった。その顔はアニメで中途半端に何話か見ただけだが俺の美女センサーが覚えてた。

フェイト・テストロッサ・ハラオウン

何故にリリカルなのは？

心の中でまたもやツツコム。

第2話 関西人の友達は正義の味方！（後書き）

強引すぎましたかね。汗

主人公は関西弁でわかりやすくしてるんですけど微妙ですね。

私は生まれも育ちも関西人なんですがうまいいきませんね。

ちなみに土郎は23歳という設定にしています。

第3話 機動六課（前書き）

第3話です。

ではどうぞ。

第3話 機動六課

side フェイト

あの2人が六課に運んでから1日がたった。

まだ意識は戻ってないのかな？

朝食を終え、シャルと私は一緒に医務室に向かった。

あの2人は本当に何者なんだろう。

どうやら考えている最中に医務室の前についたようだ。

扉を開き中に入る。

2人共、意識が戻っているらしく、シャルが2人に声を掛けた。
こちらをみてる。

2人とも大人びた雰囲気をもっていて多分年は20代前半から中盤あたりだともう。

1人は白髪に肌が黒く整った顔立ちだ。

もう1人は黒い髪でこちらも整った立ちで、今時の普通の人って感じ。

でも私を見てなんか固まってるような気がする。私の顔に何かついてるのかな？

2人に話を聞くために、気持ちを切り替え話しかける。

「私は時空管理局、機動六課所属、ライティング分隊隊長フェイト・

テストロッサ・ハラウン執務管です。お二人共、ご無事で何よりです。」

「私の名前はシャル。ここの医務室の先生をしています。2人も、もう大丈夫そうですね。」

「治療の件は感謝する。私の名前は衛宮 士郎だ。名前で呼んでくれると助かる。」

「…ああ、ぼくっとしててゴメンな。俺の名前は大和 洋介。みんなからは洋介って呼ばれてる。宜しく頼むわ。」

2人とも暴れるような雰囲気ではなさそうなので話を進める。

「2人には目覚めてすぐで悪いんですけど、この機動六課の隊長陣と一緒に話を聞かせて頂きます。」

少し渋った顔になったけど、2人とも同意してくれたので、私たちは隊長室へと向かった。

side 洋介

あり得へん。

ARRI EHEN。

なんでリリカルなのはやねんっ！

士郎は現れるしリリカルなのはやし訳わからん！

正直ここまでワケわからん事起きたから慣れてもうたし、今はもう流れに身を任そう。

そついや俺はリリカルなのはシリーズを中途半端にしか見てない。

見るのがめんどくさくなったからパソコンでオチとか調べた。

他のキャラクターの顔はフェイトの顔見たら完璧に思い出したし、過去も知つとる。

ストーリーはスカリエッティがなんか悪巧みする事は知つとるけど細かい部分は知らん。

正義は勝つらしいしどうにかなるやろ。

今は隊長室に向かう途中や。

フェイトが目の前を歩いてる。

よく観察してみる。

サラサラな金髪のロングヘア、文句の付けようのないスタイル、綺麗な顔立ち。

ほんもんな。

.....

.....

.....

……

…

いい。

非常にいい。

生はやっぱり違うな。

やっぱり綺麗な女性は癒やされる。

男の性やな。

……… までよ。

リリカルなのはって事は他にもなのはとか、はやてとかヴォルケンリッターとかFW陣がある。男のオアシスやつ！！

もしかして俺って幸運Aぐらいあるんちゃうか？

そんな素晴らしい事を考えてる内に隊長室についた。

フェイトが扉にノックし声を出す。

「はやて、例の2人を連れてきたよ。」

「了解やあゝ中にはいってゝ」

いよいよ、生はやてか楽しみやなあ〜」

俺達は部屋に入った。

周りを見渡す。部屋はやっぱりお偉いさんっぽい部屋やな。つとここであの2人が目に入る。

「2人とも元気そうやな。私は時空管理局、所属機動六課隊長の八神 はやて 言います。」

「私の名前は機動六課、所属リインフォース？曹長であります〜。よろしくです〜」2人が挨拶をしてくる。

「俺の名前は大和 洋介や。助けてくれてありがとうな。」

「私の名前は衛宮 士郎宜しく頼む。」

やっぱり士郎は警戒モードやな。

しかし、はやてもやはりいい。

綺麗とかわいいがほどよいバランスで、正に大人の階段昇る真つ最中やな。

リインフォースは……

まあ噂に違わぬミニマムやった。

来客用のソファーに座るように促され、俺たちはとりあえず座る。

座った所でノックの音がした。

「入ってやあゝ」

はやてが軽い返事で入室を許可する。

入ってきたのは三人だ。高町　なのはにヴォルケンリッターのシグナムとヴィータだ。

素晴らしい！！

生まれてきて良かった！

なのはは勿論いいのだが俺が注目したのはシグナムだ。

綺麗な桜色の髪、美しくも凛々しい顔立ち、グラマーな体型。

男の性なのか特に胸に目がいってしまう。

すごい。なんとという迫力だ！間違いなく世界を取れる！

一度でいいからシグナムの胸をナムナムして……ゲフンっ！ゲフンっ！危うい世界に入ってもうた。もう少し見つめてたら危ない目で見られる所やった。

まあヴィータはかわいらしい子供やった。

「じゃあ、みんな揃ったし自己紹介してもらおうか。」

「時空管理局、機動六課所属、スターズ分隊長高町　なのはは一等空尉です。」「同じく機動六課所属、ライティング分隊、福隊長シグナムだ。」

「ヴィータだ。」

「俺の名前は大和 洋介宜しく頼むわ。」

「衛宮 士郎だ宜しく頼む。」

「じゃあみんなの自己紹介も済んだ事やし、早速本題に入ろうかあ。」

あっ！

女の事しか考えてなくてこの後どうなるか全く考えてなかった。

時すでに遅し、というより遅過ぎ。

即興で答えるしかないか、まあどうにかなるやろ、面倒なことは士郎にパスするか。

side 士郎

今俺は機動六課という所話しをしている。

八神という人にまず気になった時空管理局の説明を受けている。

なるほど世界を渡る警察のようなものか。その過程で魔法の事や口ストロギア、次元震などの話を聞いた。

しかし魔法があるとかおおっぴらに言って大丈夫なのか？

魔術というのは秘匿にするものだし、魔法といってる時点で俺のい

た世界とは魔法という概念が違う可能性が高い。
そもそも魔導師という存在もしらない。

ここは俺がいた世界ではない可能性がますます高くなった。いや、
ほぼ確定した。

もし俺がいた世界なら長きに渡る聖杯戦争の時に管理局が何かしら
のアクションを起こしてくる筈だ。

別世界、並行世界か？やはりあの宝石翁は伊達じゃないな。

思考の海に漂っていた所で声が聞こえ我に帰る。

「じゃあ管理局の説明も終わったし、2人がなんであんなところで倒
れてたんだ説明してもらってもいいですか？」

…この質問がきたか。

俺のいきさつを説明するとなると色々面倒な事が多い。

先に洋介の方が俺に話した内容と同じように答え終わる。

必要最低限しか言っておらず後は任せた。という目線を送っている。

その内に考えた事を話した。まず俺たちはこの世界の人間じゃない
かも知れないと話し始める。

「どういう事ですか？」

「私のいた世界でも一応魔法は存在するのだが、話を聞く限りでは
魔法に対する考え方がずれているのが理由だ。私は魔導師というの
を聞いた事がない。魔法使いと魔術師なら知っている。俺の世界で

はほとんどが魔法使いではなく魔術師だ。」

「魔術師って？」

先ほどまで話を聞く事に徹していたメンバーの高町という女性が疑問を問い掛ける。

「私の世界では魔法と魔術の2つがあり簡単に言う魔法というのは魔力を通して奇跡を起こす事だと考えてくれ。例えば死者蘇生が当てはまる。魔術というのはそれ以外の事だな。身体強化や火を出す事などが魔術だ。」

「なるほど。何故この話を？」

八神が質問する。

「私のいた世界では魔術とは秘匿する物で自分の為に使う物というのが常識だ。しかし私は一般人を救うために使い、魔法協会という機関に追われる身になってしまった。その連中と戦闘した際に怪我を負ってしまった。その時に知り合いに助けて貰ってね、この世界に送られた訳だ。ちなみに俺たちが一緒の世界から来たという理由は今ほど目覚めた時、お互いの事を話した時にわかった。これは間違いない。」

正直、魔術の事を話したくはなかったが、怪我をしていた理由の説明、何より魔力を持っている事は向こうには知られている可能性が高かったのだ。

しかも俺の魔術を見ればすぐに異端だと気付かれる可能性もある。

変にはぐらかして犯罪者に思われるのもまっぴらゴメンだしな。

固有結界の事とかは話さなくても問題ないだろう。あまり自分の手ををさらす必要もない。

「そういう事ですか。かなりビックリしました。まさか魔法が自分の為にしか使わんとは…あつ！ちなみに大和さんも魔力あるみたいやけど魔術師なんですか？」

「いや、俺はオトンが情報屋で魔術師の事とかは知つとるけど一般人や。魔力あるの知つたのもさつき医務室で士郎にあるって言われて気付いたしな。」

「そうですか……2人とも次元漂流者って事やな。2人はどうするつもりで？」

「俺はおつた世界には別に戻りたいっていう気持ちないから、とりあえず衣食住の確保やな」

「私も彼と同じだ。」

「じゃあ2人ともしばらく六課にお世話になりませんか？あてもないやろっし？」

「はやて！大丈夫なのかっ！？」ヴィータが声をあげる。

「ヴィータ、大丈夫や。この人達は悪い事するような人やない。」

「私も大丈夫だと思うよ。ねっフェイトちゃん？」

「うん。私もそう思う。」

そう話すのはとフェイト。シグナムも納得している様子。ヴィー
タも一応、納得したようだ。

「じゃあ決定や。2人ともこれから宜しく願いします。」

「こちらこそ。あと年も近そうやし敬語はええで。あんまり固いの
は好きやない。後、勝手に名前で呼ぶけどそれはクセやから勘弁し
てくれ。俺の呼び方は好きにしてくれたらええ。」

「宜しくな。俺も敬語はいらないぞ。あと名前で呼んでほしい。」

「わかり…わかった。ちなみに2人は何歳なん？あと土郎さん、喋
り方変わったけどなんでなん？」

「俺は二十歳や。」

「俺は二十三歳だ。喋り方が変わるのはまあクセみたいな物かな。
普段は普通の喋り方だから、安心してくれ。」

「2人とも雰囲気が大人すぎるから何歳かようわからなかったわ。」

土郎の喋り方が変わった事にみんな驚いていたが納得したようだ。

「じゃあ改めて、ようこそ機動六課へ！」

セイバー、俺はまだ答えなんか得ていないけど、ここでまた正義の
味方をして、答えをみつけてみせるよ。

こうして機動六課での暮らしが始まった。

第3話 機動六課（後書き）

オリ主とはやてが関西弁でかぶって難しい。

誰が喋ってるかわかりやすくするのって難しいですね。

第4話 師弟関係（前書き）

ハイペースで今は更新しています。

もうちょっとしたら周に一回のペースで更新すると思います。

それではどうぞ。

第4話 師弟関係

機動六課のエントランスに人が見える。

そこには、隊長陣とヴォルケンリッター、フォワード陣、そしてあの二人がいる。

どうやらお互いの自己紹介をしているようだ。

その時に洋介がスバルとティアナを見て、「いい…」と言っていたのはお約束だ。

士郎にいたってはやはりというべきか、「確かにこの名前の響きは君によく合っている。」と天然ジゴロモード全開だった。

2人は壁を持つている雰囲気を持っていなかったで、特に問題も無く馴染んでいけそうな様子だ。

エリオとキャロにはひどく気に入られ、お兄さんと呼ばれる始末だ。紹介もお互いに済んだ所でちょうど昼時ということもあり、食堂へ向かった。

「なんちゅう量や…」

洋介の目線の先は盛られているスパゲティをかき込むスバルとエリオだ。

わかつてはいたが、改めて見ると圧巻だ。

士郎もハラペコ王の食事係だったが、今目の前にはそれに匹敵する人間が2人もいることに驚いている様子だ。

「「どうかしたんですか？」」

スバルとエリオが視線に気づき、声を出す。

「いや…めっちゃ食べるなと思ってな。」

「普通ですよ。ねっスバルさん。」

もきゅもきゅと食べているスバルがコクコクと頷く。

「はあくいつもの事ですから、気にしないでください。」

呆れたように答えるティアナ。

2人はなぜかすぐに納得してしまった。

ここでキャラが疑問に思っていた事を口にする。

「そういえば、お兄ちゃん達はどっいったいきさつでここにきたんですか？」

「車にひかれたらおったな。」

「知り合いに飛ばされた。」

「あはは…そうですか。」

あまりにもシンプルすぎる答えに苦笑いのキャラ。

「それにしても機動六課は女の子が多いな。何か決意があつてこの場にいるのはわかるが、あまり女の子が戦うのは好きじゃあない。」

「そつやな、こんな可愛い子達が傷物になったら大変や。」

士郎の話に洋介も乗っかる。

「「「「つ!?」「」」」

女性陣が頬を赤く染める。どうやら可愛いという言葉に反応したようだ。

洋介は別に鈍感でもなく誑しでもないのだが、正直に言い過ぎた。というよりここまで初だとは思わなかった。

そんな事を言った当の本人はというと……

政府は何をやってんねや!!

アホな政策やるんやったら、この天使達の様子を写真にして世の中の男に癒しを与えてやるべきや!!

アホだった。

「っ!? そやつ!! 2人とも服とか何もないやろ? この後グラナガ
ンに服買いにいったらどうや」

照れをごまかすために提案するはやて。

「そつやな。でもどこにあるんや?」

「確かに。俺たちはこの世界の事をわからないし誰かついてきてく

れるとありがたいんだが…」

「じゃあ私が案内するよ。なのは達は忙しいし」

「フェイトちゃんすまんな」

「何からなにまで済まん。宜しく頼む。」

食事を終え三人は早速首都グラナガンへ向かう。

行く途中の道のりや町並みを見たが、文明が進んでいる割にはあまりすごい発見はなかった。

グラナガンに到着し早速買い物を始める。

男の買い物という事もあり結構早くに終わった。

今は洋介のスイーツを食べたいという希望でグラナガンで有名だという「メーブル」という店のアイスを食べている。

「うまうま」

満開の笑顔でアイスを食べる洋介。

「洋介ってアイス好きなんだ。なんか以外。」

「フェイトそれは違う、甘いもの全般や。」

「なんか女の子みたいだね。」

「確かに。なんか似合わないな。」

「うっさい！人の好みはフリーダムや！」

道中で会話を重ねたフェイトは洋介と士郎に慣れたようだ。

士郎と洋介も一緒にいた時間は短いのだが、男同士という事もあり問題なし。

アイスを食べた洋介が買い物のついでに買ったタバコに火を付ける。2人には勿論、同意を得てから吸っている。

「士郎、頼みがあんないいか？」

「なんだ？」

「いつでもいいから士郎の料理が食いたい！！」

Fateを知っている人なら一度は思っていることだろう。

士郎の料理を食べてみたいと…俺はその先駆者になるんや！！

あつ！ちなみに先駆者とかいてパイオニアと読んでくれ！
なんかカッコよくない？

「士郎って料理得意なの？」

「確かに料理は得意だが、喜んで食べてくれるなら全然かまわないよ。洋介って俺が料理得意なの知ってたっけ？」

「情報でチェック済みや！！」

サムズアップし笑顔で答える。

「なんです」

「私も食べてみたいな。」

「まあはやてに許可をとったらいつでもいいぞ。」

「楽しみにしとくわ!!」

「ああ。期待してくれ。」

こうして楽しみを得た後三人は機動六課に帰った。

帰った後は部屋を案内された。

どうやらエリオの隣に洋介の部屋さらにその隣が士郎の部屋になったようだ。

ベット等の必要な物は完備されていた。2人は買ってきた服に着替え、残りを片付け、再びフェイトと合流する。

ここの施設内の案内だ。大体の道を2人とも把握したところで、最後のトレーニングルームへと向かう。

そこではなのはとフォワード陣が訓練をしている最中で見学することにした。

先客のヴィータとシグナムと一緒に様子を見る。

洋介と士郎としても実際にこの世界の魔法を見てみたかったので好

都合だった。洋介は勿論どんなものかは知っている。しかし改めて見ると魔法というより「科学」っぽいなと思った。

士郎もそのよう顔をしている。

デバイスの説明をフェイトにもらいつつも訓練を見ていた。訓練が終わったようで、なのはとフォワード陣がこちらにくる。

「洋介君、士郎君どうだったかな？」

単純に魔法の感想を聞いてみたのはだが、その上をいく感想を言われた。

「そうやな…魔法に関してはようわからんから、皆の動きに対しての感想や。経験が足りひんのかしらんけど、判断に迷って行動が遅れる所が何度かあったな。ティアナが全体を注意して、冷静に的確な指示を出してたな。上出来や。スバルは大雑把な動きがあったけどパワーはあるし、エリオはスピードと突貫力もある。キャラのフオローも良かった。チームワークもまあまあ。まあこれからやる。」

皆は驚愕した。ただの一般人だと思っていた人間がこの短時間でこのような感想をいったからだ。ここですぐに冷静になった士郎が声を出す。

「それだけの事が言えるということは、洋介は何か武術を学んでいたのか？」

「まあガキの頃から剣術と体術は嗜んでるで。」

成るほど、あれほどの感想を言えるという事は中々の使い手だということだな。

観察眼もたいした物だし分析力もいい。

「俺はただの一般人だと思ってたよ。」

「いやいや、一般人やから変な誤解はナシやで」

「皆には悪いけど感想は洋介がほとんどいつてくれたから特に言うことはないよ。」

「おまえ、スゴいな……」

ヴィータの素直な感想に、なのは達は頷くしかなかった。

確かに洋介に話を振ったが、ここまで深くコメントをくれるとは思っていなかったからだ。

「剣術をしているのか、一度手合わせ願いたいものだな。」

バトルマニアのシグナムが言う。

「それは出来れば遠慮したいな。ってか俺よりも士郎の方が強いで。」

「それは本当か……!」

食いついてきたシグナム。

このまま士郎にいつてくれ!!

「いや確かに剣の心得はあるが、俺には剣の才能なんかないよ。」

「いやそれは手合わせしないとわからない事だ、私と勝負してくれ」

ないか？」

「いいんじゃないかな。士郎君の力を知るいい機会だし。ついでに洋介君もシグナムと勝負してみよっか？」

2人の力がどの程度なのか気になり提案するのは。

「わかったよ。俺の力がどの程度、通用するかも確認したいし。」

なんでやねん！！

俺、さつき士郎にふった意味まったくないやん！士郎、ふつと言うのもなんやけど魔術は秘匿にするもんやろっ！！

なのはさんよ、ついでにつて何？俺はセツト物のオマケか！？

民間協力でもない保護しとる宇宙の迷子に戦わすつてなんやねんっ！
だいたいお宅ら俺が魔法使われへんのお分かり？？

ツッコミの嵐である。

内心かなり焦りだす洋介だった。

何故か強制的に明日の朝の訓練が終わった後、模擬戦が確定してしまった。ただし、洋介は魔法なしでの模擬戦になった事が唯一の救いだろう。

そうして晩の訓練が終了した。

フォワード陣達がシャワーに入る。

洋介と士郎も全く風呂等には入っていなかったので一緒に入り晩御飯を済まし部屋に戻る。

しかし、洋介は自分の部屋には戻らず士郎の部屋にいた。

「どうしたんだ洋介？話ってなんだ？」

「いや、医務室で話した時俺に魔力あるっていったやろ？

どれくらいあのかかって思ってたな。調べることも出来るか？

今後どんな事あるかわからんやろ？

あと魔術を教えて欲しいと思ってたな」

洋介は今後どのような事があるか大体わかる。

しかし、自分と士郎というイレギュラーがいる時点で予測不能な事が起きる可能性はかなり高い。

なので今後の対策として士郎に魔術の話を持ちかけた訳だ。

だが本心は別の所にある。もし機動六課をぬけた場合だ。

もし機動六課を抜けたら身を守る力が必要だ。勿論、士郎を救う為にはそれ相応の力が必要だというのも理由だ。

今は機動六課に世話になることになったが、時空管理局という組織は正直好きではない。

どこの組織にも言える事だが、闇の部分がある。みんながみんな良い事をするために働いている訳ではないから当然だ。もしかしたら闇の部分から被害を受ける可能性もある。

自分達が正義といって勝手に勝手に管理してるというのも気に食わない。

正義の形なんて山ほどあるし、どれが正しいかなんて人の価値観の

違いで変わる脆弱な物だ。

洋介は、なのは達の人柄は信用していいと判断したためにいるだけだ。

正直に言えばなのは達の甘ちゃんな部分も好きではない。

世の中綺麗事だけで済んでるならもったいい世界になってる筈だ。

なのは達の事はともかくとして、士郎も似たり寄つたりの考え方だと思つし、ある程度この世界の情報を集めたらどこかにいつてしまう可能性は0とは言い切れない。士郎とバラバラになるというのは些か問題ありだが、遠回しでも味方になればいいと思つている。

「成るほど、取りあえず調べてみるか。つと、その前に俺の方に何か異常がないか調べさせてもらう」

そしてあの言葉を紡ぐ。

「同調、開始―トレース・オン」

鞘・・・正常稼働確認

身体機能・・・正常

魔術回路・・・27

取りあえず問題はなし。試しにあの夫婦剣を投影してみる。

「同調、開始―トレース・オン」

いつも通りに成功し、両手に馴染んだ感触がする。

ふむ。問題はないようだな。

「それが士郎の魔術か？投影ばかったけど……」

洋介の声で我に帰る。

洋介は知っているが敢えて知らないように質問する。

「ああ投影が俺の魔術だ。俺の投影はチョット特殊でな。ちつとやそつとじゃ消えないんだ。俺の体には特に異常はなかったよ。」

「そうなんか。えらい力やな。」

「じゃあ洋介の方も調べるか。」

「同調、開始―トレース・オン―」

「……………なにっ！！魔術回路が36もあるだっ！！」

士郎は驚愕した。魔術の事を知っているとはいえ、一般人がこんなに魔術回路があるとは思わなかった。「まじで！！そっかゝそれってどうなん？」

「ああ。一般人では凄い事だな魔力量も俺より多いようだ。」

内心は100位あると思っていたので、中途半端な量とか思っていたりする。

「ほんと洋介には驚かされるよ。ところで……………君は本気か？魔術を教えて欲しいというのは？」

「本気やで。俺は。」

短い答え方だが声には相当な重みを込めているのが伺える。

2人とも真剣な口調になり、部屋が静寂に包まれる。

士郎は特に何を聞くでもなくあの赤き弓兵のように鷹の目で洋介の目を見て何かを見定めるように見る。

洋介もそれに応えるかのように士郎の目を見た。

「……………はぁ頑固なやつだ。仕方ない。魔術を教えよう。」士郎がどうやら大丈夫だと判断したようだ。

「おおきに。」

「でも、俺が教えれそうなのは強化ぐらいしかないぞ。しかも教えた経験がない。」

「別にそれでかまわへん。俺も投影とか出来る気せえへんからな。まあ宜しく頼むで。」

今日はこのぐらいで失礼するわ。ほなまた明日。」

「ああ。また明日。」

洋介と士郎の師弟関係が結ばれた。

第4話 師弟関係（後書き）

んゝ魔術を教わる過程が軽かったような。汗

考えた主人公の設定を文章に表すのが大変ですね
まだまだ未熟ですが、感想を頂けたら幸いです。

第5話 原作者の力（前書き）

いよいよ模擬戦です。

士郎が活躍します。

では、どうぞ。

第5話 贋作者の力

明朝の5時

この朝早い時間帯に一人の姿が見える。

普通の人間なら寝ててもおかしくないこの時間に土郎は起きていた。

何故この時間帯に土郎が起床したのかは理由がある。

昨日の模擬戦の件である。

パジャマから動きやすい服に着替え終えている。

土郎は寝ているだろう洋介の部屋の前にいる。

ドアをノックするが返事が返ってこない

「洋介入るぞ？」

自動ドアが開き中に入るが、ベッドでは案の定ぐっすり眠っている洋介が居る。

「洋介、朝だぞ。」

「スー……スー……」

いくら揺すつても言葉をかけても彼は一向に起きる気配はなく静かに寝息を立てている

「仕方ない。」士郎は洋介の鼻をつまむ。

5秒後

「ふなあ~~~~~!!」

洋介起床

「おはよう。洋介。昨日、模擬戦するっていつてただろ？早く支度を済ませてくれ」

「起こし方の謝罪はナシか!!」

「なかなか洋介が起きないからさ。」

「ヤローに起こされる朝とは目覚めが悪い…」

「ここは普通女の子が起こしてくれて何かイベントを起こすのが筋つてもんちゃうか？」

「なんでさ」

洋介は支度を済ませ士郎とトレーニングルームへと向かっている。

「なんで、こんな早くにおこしたんや？」

「さっき言っただろ？昨日、模擬戦するって決まっただじゃないか？」

「……………なんか腹痛いわ」

「ばれやすい嘘を言うなっ」

軽い漫才をしている内に訓練場に着き、先に来ていた隊長陣と合流する

「おはよう二人とも、昨日はよく眠れた？」

「それなりにやな……」

「でも訓練ってこんな朝早くからやるんだな」

そんな会話をしていると、フォワードメンバーがこちらに向かって来ている姿が見えた

「……………おはようございます……」

「おはようみんな」

「士郎さん達もおはようございます」

「おはよう」

「ああ〜おはようさん」

スバル達の快活な挨拶になのはと士郎はこれを笑顔で返すが洋介は相変わらず眠たそうな態度で返す

「早速士郎君と、洋介くん、シグナムの模擬戦ね」

「ふむ、そうだな」

「じゃあ、先に士郎君とシグナムの模擬戦ね」

「わかったよ」

士郎とシグナムがアップをしている間に洋介、六課メンバーは観戦室に行く。

「どっちが勝つと思うティア？」

「シグナム副隊長に決まってるでしょう？ 士郎さんがどれくらい力があるかわからないけど、シグナム副隊長の実力は管理局でもトップクラスだし。」

スバルとティアナが予想をたてる。エリオとキャロもその様子だ。隊長陣は士郎の魔術という物がわからないが、それなりの勝負をするところ止まりで、同じくシグナムが勝つと思っている。

ここで先程から黙っている洋介にフェイトが話しかける

「洋介はどっちが勝つと思う？」

「苦戦はするかも知らんけど、間違いないく士郎やな。」

士郎が勝つと断言した洋介に皆は驚いた様子だ。

「どっしてそう思っの？」

「勘や。みんなシグナムが勝つと思つとるみたいやし一人くらい士郎に肩もたんな」

2人はアップを終え、シグナムはバリアジャケットを身につけ、士郎も赤き弓兵と同じ格好に変わっている。

「士郎、それがお前のバリアジャケットか？」

「まあそんなものだ」

『2人とも準備出来たみたいだね、じゃあいくよ…レディーゴー！』

「同調開始 トレース・オン」

士郎は、二本の双剣を投影する。夫婦剣、干将・莫耶だ。

両手をだらりと下げ自然体を取り、鷹の瞳がシグナムを射抜き光り輝く。

空気がピリピリと張り詰める。

シグナムは、緊張感を高めた。

「それが、魔術というやつか…どうやってその剣は出したんだ？」

「それは企業秘密だ」

「そうか、ではいくぞっ」

言い終わるや否や、すぐさま間合いを詰め手にしたレヴァンティンで切りかかる

迫りくる剣を双剣で防いだ。刃と刃が鳴り響き大剣は止まった。

「想像以上に重いな」

「っ！？やるな！」どれぐらい打ち合ったのかはわからない
シグナムの連撃を柳が風をしなるかの如く捌く士郎。お互いの、剣
戟は続く。

観戦していたなのは達は驚きを隠せないでいた。

「すごい。あのシグナムと互角に打ち合えてる」

「あの剣が持っている魔力もすごいね」

そう話すのはとフェイト。

一連の動きがすごすぎてFW4人はあんぐりと口を開けていた。
無理もない。魔導士ランクがS-のシグナムと士郎がいい勝負をしているのだ。

洋介は生で士郎の戦いを見て改めてすごいと思っていた。

（さすが士郎やな、生でみたらまた迫力が全然ちがう。さすが正義の味方を追い続けるだけの実力や。でもこれからが問題やな、シグナムもやはり強い。一筋縄じゃ無理やで。さてと士郎はどこまで手札を見せるつもりや？お手並み拝見させてもらおうかあ）

シグナムの剣の腕は確かに一流だ。

しかし、士郎はあの聖杯戦争を生き抜いた身だ。

あの英霊達と戦い抜いたのだ。

セイバーと別れた数年間、幾度となくセイバーを相手にしてのシャドーを行った。

それに比べればシグナムの攻撃はまだ優しいほうだった。

ここでシグナムがバックステップで間合いを開け動き出す

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

《Explosion》

レヴァンティンがカートリッジを一発ロードする。

ガシヨンという音と共につばの部分がスライドし薬きょうが排出される。

そして、レヴァンティンの刀身を魔力の炎熱変換により炎が包み込

む。

「紫電一閃！」

シグナムはダッシュし士郎目掛けて突進する。

士郎は強化魔法を強め待ち構える。

「はあああああつ！！！」

士郎がシグナムの剣を双剣で受け止めようとするが吹き飛ばされる。だが、シグナムには手応えがなかった。

士郎はあえて吹き飛ばされたのだ。

士郎はあの一撃を受け止めたと同時に士郎は後ろへと飛び威力を綺麗に殺してみせたのだ。

士郎には傷一つついておらず、こちらを見ていた。

シグナムは感動していた。

今、自分のいる者は間違いなく強者だと。

「さて、次はこちらの番だ」

士郎は両手に持っている、干将・莫耶をシグナムに投擲する。
シグナムはその行動に驚いたが、すぐに切り払おうとするが…

「壊れた幻想 ブロークン・ファンタズム」

「なっ！！」

その行動は実現することなく霧散する。

干将・莫耶は爆発を起こし粉塵があがる。

シグナムは何とかプロテクションを張り爆発を防げたが視界が悪い。

「I am the bone of my sword . 我が
骨子は捻じれ狂う」

煙が晴れる前に黒い洋弓を投影する。矢は螺旋剣。

「偽・螺旋剣 カラドボルグ」

またもや観戦していたメンバーが驚く。

「またなにもない所から出しやがった！！しかもあの剣、かなりの
魔力がある！！」

ヴィータが声を上げる。

「まさか剣を弓にするつもり？」

フェイトは驚きつつも分析する。

洋介もさすがに驚いていた。
別の意味でだ。

（壊れた幻想、止まりやと思ってたけど、まさかカラドボルクまで
出すとはえらいサービスやな。それだけの相手っていう事なんか？）

放つと同時に煙が晴れ、士郎を視認したシグナムが驚きプロテクシ
ョンを張る。

螺旋を描きながら迫りくる剣がシグナムの張ったプロテクションに
当たる。

「くっ！！」

シグナムは螺旋剣の想像以上の威力に驚くが、何とかありったけの
魔力で防ごうとする。

が…またもやそれは徒労に終わる。

「壊れた幻想 ブローケン・ファンタズム」

何とか耐えていたシグナムだが宝具の爆発により、プロテクションが粉々に砕け散り吹っ飛ぶ。
シグナムはありったけの魔力を使い何とか傷は浅くすぐに立ち上がり体勢を整える。

「まだやるかね？」

後方から声が聞こえる。

士郎は爆発と同時に干将・莫耶を再び投影し、シグナムの背後へと回り首筋に剣を突き付けていた。

「なっ！！…私の負けだ」

降参を確認し双剣を破棄する。

「まさか、これ程の力とはな」

「そんなことないさ。」

勝負は士郎の勝ちで終わった。

観戦していたメンバーが駆け寄る。

「大丈夫シグナム？」

「少し疲れたが問題はないテストロッサ」

「シグナムに勝つなんてすごいね士郎君。さっきのが魔術なの？」

士郎が軽く魔術の説明をする。

投影の事は説明されたがカラドボルグ等のことははぐらかされたようだ。

「それにしても士郎兄さんは剣の才能がないって言ってましたけど、打ち合えてましたよね？」

エリオが疑問を問いかける

「確かに、私と打ち合っではいたが士郎の言う通り彼には剣の才能がない。」

「えっ？でもそれだとシグナム副隊長と打ち合えないんじゃないですか？」

「スバルの言う通りや、でも士郎は才能を補うために努力をしたってことやな。まあ他にも士郎の戦い方にも理由があるけどな。」

「どういことですか？」

「ティアナ、それは簡単な事や。士郎がしたのは攻撃する所を特定させたんや」

「そんなことありえせん！」

「それが出来るんや士郎の場合はな。士郎はな打ち合ってる時に自然に隙を作ったんや。隙が出来たらそこを突くのは当然の事やろ？当たり前やけど全部にそれをしてる訳ちゃうで。」

「そんな…」

士郎には驚かされてばかりである。

こんなこと並大抵の努力で辿りつくようなものではない。

どのような事をすればそんな境地に至るのだろうか不思議で仕方なかった。

その事でこの士郎の動きを理解していた洋介に疑問を抱くものはいなかった。

「そんなに大した事はないさ、俺には才能が無いから努力して、どうすれば勝てるのか考えた結果の戦い方だ。もしあのまま純粹に剣だけで勝負してたらシグナムには勝てなかったしな。」

士郎は本来「担い手」ではない、「作り手」だ。士郎は弓の腕こそ一流だが、他は全くといっていいほど才能が無かった。

その現実を悲観することなく受け止め、ただひたすらに二流を極めた領域。

「何が大した事ないやねん！ほんま、ようそんなこと言えるわっ！」

決着もついたのでなのはと、フォワードメンバーは訓練を再開する。洋介とシグナムの模擬戦は次回に持ち越しになった。

訓練では士郎達に感化されてかフォワードメンバーはいつも以上に訓練に励んでた。

（ってか俺、全く活躍してへんやん！！）

自分の影が薄くなる事を心配していた。

第5話 原作者の力（後書き）

戦闘描写が難しくかなり手間取りました。

なかなかうまくいかない事がありますが頑張ります。

第6話 六課の日々とこれから（前書き）

またもやグダグダになっちゃいました。

んゝ難しい。

ではどうぞ。

第6話 六課の日々とこれから

あの模擬戦から数日後

洋介と士郎は特に問題なく過ごしていた。

フォワードメンバーの訓練も終わり、今トレーニングルームには2人の姿が見える。

洋介と士郎だ。

今、2人は鍛錬の真っ最中である。

「ふっ!!」

洋介の木刀が士郎に迫る。

士郎は小太刀の木刀を両手に持ち、その一撃を左手の木刀で防ぐ。

「はっ!!」

士郎はすぐさま空いている右手の木刀を洋介の胸に最短距離で突く。

洋介はそれに反応しバックステップで回避し、すぐさま袈裟切り、そのまま右に切り払い、切り落としと連撃を繰り返すがすべて防がれる。

「やっぱ士郎の守りは堅いな」

「そう簡単にやられる訳にはいかないからな。洋介も大したスピードじゃないか。」

「まだまだこれからや」

再び右から左に薙ぎ払いそのままの勢いを活かし蹴りを放つ。この攻撃を防ぎ、士郎は右手の木刀で薙ぎ払う。

それをスウエーでかわし、すぐさま攻撃を仕掛ける。

再び、熾烈な攻防が繰り返される

しばらく攻防を繰り返した時、一度互いに距離を開け洋介が話し出す。

「士郎、そろそろシメといこか、今から仕掛ける攻撃を防いでみ」

「望む所だ」

洋介が士郎に挑発し士郎はそれにあえて乗っかる。

洋介は突っ込み、その勢いを活かし切りつける。

士郎はそれを丁寧防ぐ。しかし、洋介の手は止まらず、剣撃と体術を織り交ぜた攻撃をお構いなしに繰り出す。

「くっ！しっこいっ！！」

士郎は最初こそは対処で出来ていたが今は余裕がなくなっている。

「食らえやつ！！」

ここで強烈な蹴りを繰り出した。

士郎は防いだが軽く吹き飛ばされる。

一気に距離を詰めるが、ここで意外な行動を起こす。

持っている木刀を投げつけたのだ。

士郎は驚くがなんとか右手の木刀で弾く。

洋介は士郎が弾く事を予想したかのようにすでに行動を起こしていた。

前に飛び一回転、そのまま踵を士郎めがけて下ろした。

頭部への直撃こそ避けたが肩にヒットする。

「くっ…」

「俺の勝ちやな」

2人の訓練は終了する。

本日は洋介の勝ちだが、総合的にみたら五分五分といった所だ。

模擬戦があった日から数日後このように鍛錬を行うようになった。

初めてなのは達が洋介の戦いっぷりを見ていた時は大変驚いていた。

持ち越しになったシグナムとの模擬戦は洋介が「まだ人生を終えるには早すぎる」といい頑なに拒否をしている。

あれから時間を潰し、今は昼食を取る為に食堂にいる洋介達だが、いつもと光景が違っていた。

「ほら、出来たぞ」

そこには野菜炒めと大根の味噌汁とシンプルな物だった。

先日、土郎の料理を作ってもらった約束をしていた件もありはやくに許可をもらい振る舞っていたのだ。

その時にはやてがみんなにも作って欲しいという条件をつけたのだ。

「野菜炒めって輝くもんやったけ？」

「うちも初めてみたわ……」

そう言っているのは洋介とはやての関西弁コンビだ。

「すごいおいしそうだね！」

「なのは！こんな、料理よりはやての料理の方がうめえよ」

「クククっ…ヴィータ、その言葉すぐに後悔させてやる。」

士郎の豹変にみんなが驚く。

そんな中、スバルとエリオは今にも食いつきそうな顔している。

「ほな、飯も行き渡ったようやしたべよか」

洋介の声に反応し、一同は「いただきます」と言って食べる。

洋介は待ち望んだ士郎の料理を食べて想像を遥か上をいく美味しさに感動した。

「犯罪級のうまさや…士郎、君にはゴッドハンドの称号を与えよう」

「負けたっ…野菜の味を最大限に引き出しとる！」

はやては自分より美味しい料理に悔しがっている。

「これは…中々」

シグナムは表情を穏やかな笑顔にして食べている。

スバルとエリオはあまりの美味しさに何も言わず一心不乱に箸を進める。

「士郎お兄さん、すごく美味しです。」

「キユク〜」

キャラとフリードも大満足のようだ。

他の女性陣も美味しいと思ったが女性として負けたという気持ちの方が大きい模様。

「『『『ご馳走様でした！』』』」

「お粗末様です。みんなが美味しく食べてくれて良かったよ。」

一同大満足で完食をした様子を見て安心した様子を見せる士郎。

「所でヴィータ、私の料理は如何だったかな？」

「…まあまあだな」

「口にあわなかったか…残念だな。ではデザートで作ったスイーツポテトはスバルにでも回すか。」

デザートという言葉に反応する一同。

士郎の料理の美味しさは先程把握済み、デザートの方にも期待するのは当然の事だろう。

「なっ！卑怯だぞ！！」

「どうしたのかね？口に合わなかったのだろうか？」

士郎は確信犯である。先程ヴィータが美味しそうに食べていた様子を確認したが、あえて知らん振りをしているのだ。

「ぐっ…美味しかったです。」

「素直で宜しい。」

その後、美味しくスイートポテトを頂いた。

その時に甘い物好きの洋介があまりの美味しさに毎日作ってくれと、士郎に頼んでいたのは内緒の話だったりする。

現在は夜

機動六課の庭で煙草の煙を上げる洋介の姿が見えた。

「すまない、待たせた。」

「んじゃ、頼んますわ先生！」

そういつて煙草を携帯灰皿に入れる。

毎晩、洋介と士郎は夜になると魔術の特訓をしているのだ。

師弟関係を結んだ次の夜に魔術回路の入り切りを出来るようになる
為、無理矢理魔力を流された時は激痛との戦いだっただ。

「それにしてもこの短期間で強化が出来るとはな」

「俺もなんか不思議やわ、士郎の教え方がよかったんちゃうか？」

洋介はこの短期間で強化を身に付けたのだ。

それは洋介がF a t eで得た知識というのも大きな要因だ。

しかし、それでも実際にやって出来ると言う訳でもない。

洋介が持つイメージが良かったのだ。イメージとはとても大切なも

のだ。

例えば、バスケットでシュートを練習してる人がいる。

しかし、あまりシュートは入らない。

そこでイメージをしてみるとアドバイスをする。ボールが手から離れ美しい放物線を描き、ゴールへと吸いこまれるイメージを。そのイメージをもちながら練習を重ねる。そして入らなかったシュートが入るようになったというのは珍しくはない。それほどイメージというのは重要である。

洋介は目を閉じ集中する。体内にある魔術回路を起動させ魔力が流れるイメージを浮かべる。そしてその魔力が自分の脚に集まり力が集約していくイメージをもちながら実行する。

そして洋介は走り出す。その速さは人が出せる速度ではなかった。

「うん。成功やな。」

「洋介は元々感覚的に魔力のコントロールは上手なようだな。」

「お褒めに預かり光栄や。でもまだまだやな、時間がかかるとるわ。」

「それにしても洋介は身体能力がかなり高いし、強化をマスターしたら充分な武器になるよ。どんな事してたんだ？」

強化は術者に力をもたらすが良い所ばかりではない。

強化をかけ続け肉体を酷使すれば、肉体にはそれだけの反動が帰ってくるのだ。

しかし洋介の場合は一般人と言っているがそれを嘲笑うかの如く身体能力が高い。

異常なのだ。

士郎は洋介に疑問に持つ事が多かった。

「まあそれはまた今度。まあ俺が強くなったのは師匠の特訓のお陰やな。」

「洋介は剣の腕前は相当凄いし、どういった鍛錬をしてたんだ？」

「十二の試練【ゴッドハンド】のようなもんや。」

「……それは聞かないでおこう。」

「おおきに。そついや士郎、これからどないすんねや？六課に世話になり続けるんか？」

洋介が前々から気になっていた事を聞く。

「時空管理局というのはまだ信用出来ない。けど六課の人は信用出来ると思う。だからしばらく世話になるよ。はやて達が追っている事件も気になるし出来れば協力したい。」

「流石、正義の味方だな。その力は目立つで？」

「ほつとけないんだよ。そういう洋介こそどうするんだ？」

「まあ似たり寄ったりかな？ここの知識をもう少し集めたいし、しばらく世話になる。」

洋介は士郎の考えが自分と同じという予想は的中していた。

しかし六課の手伝いをしたいというのは油断していた。

士郎がこういう行動するのは少し頭を使えば容易く想像出来た事だ。

これから厄介な事にならない事を祈る洋介だった。

第6話 六課の日々とこれから（後書き）

毎日書くのは楽しいんですがみなさんに上手く伝えるのが難しい。

どうなんだろう？

上手にかけるように精進しますので、これからも宜しく願います！

第7話 過去（前書き）

7話完成です！

どうぞ！！

第7話 過去

今、隊長室にははやてと洋介と士郎がいる。

「ほんまにええんか2人共？人手が足りんからこちらとしては有り難いねんけど…」

「ああ。こういうのはほっとけないタチでな。」

「俺はそのオマケや。借りを作るのもイヤやし。」

先日、士郎と洋介が話し合った結果、民間協力者として手伝うと決定したのだ。

「わかった。じゃあ改めて宜しく頼みます。」

その後、2人は現在追いかけているレリックやガジェットの詳細を聞いた。

「後な協力してくれて早々やけどもう任務がきててな。」

「任務って何や？」

「3日後にな、ホテルアグスタってところで骨董美術品オークションがあるんやけど、その会場警備と人員警護が任務や。」

「その理由は？」

「その中には取引許可がでてるロストロギアあるから、誤認で反応して襲ってくる可能性があるんや。この手のオークションは密輸取引の隠れ蓑にもなる。」

「なる程、了解した。」

（もう初出撃は終わってたんか…ああこの後テアアナの事があるな。）

洋介達は事件の協力の話をなのは達にも伝え、食堂で食事中だ。

「土郎の飯はホンマうまいわぁ。」

士郎はあの料理の事があって以来、週に三回は料理を振る舞うようになった。

「今日のデザートは何ですか？」

「今日はケーキだよスバル。」

「では早速もってくるがよい。」

「洋介、君は何様のつもりだ？」

そんな会話を交わしつつも、何だかんだでケーキを持ってくる士郎。

ケーキは3種類あり、ショートケーキにチョコレートケーキ、チーズケーキだ。

「三種類も作っただね士郎君。」

なのはが驚きつつ言う。

「ああ少し張り切ってしまっただも1人2つだぞ。」

「なんですとっ！それは俺に死ねと？？」

「洋介はいちいち大袈裟なんだよ。」

どれを選ぶのかで少しドタバタしたが、みんなに行き渡り食べている。

スバルはケーキを味わいつつも何故かキョロキョロしている。

「どないしたんや？」

「いや、チョコレートケーキの味が気になって…」

「しゃあないな、ほれっ！」

「えっ…」

洋介は今、フォークにケーキを乗せスバルへと差し出している。所謂、あーんという事だ。所

スバルが固まっているのはそういうワケだ。皆も洋介の行動に驚いている。

洋介は士郎には及ばないものの整った顔立ちをしている、男性と接する経験はあまりなく照れてしまうのは当然だ。

「ほれっ！はよ食わな落としてまうやる！」

「うつ…／＼あーん／＼／」

「スバル、旨いか？」

スバルは頬を真っ赤にしている。味はあまりわからなかったが、コクコクと頷く。

（かわええな…この姿はこの眼に焼き付けとこ）
相変わらずのバカだ。

「洋介さん、それ間接キスやで…」

それを聞いたスバルが更に顔を赤く染め、耳の裏まで真っ赤だ。

皆も少し頬を多少染め上げている。

「はやて、俺はそういうのは気にするタイプちゃうからな。はやてもしたるうか？」

「っ／＼なにいつとるんやっ！」

「ははっ照れるな照れるな！」

洋介ははやてをからかい楽しんでた。その照れた顔を脳にメモリーしたのは言うまでもない。

その後、特にこれといった事もなく、夜になり、いつも通り洋介と士郎は魔術の特訓をしている所だった。

「なあ士郎」

「どうした？」

洋介が手を止め士郎に話しかける。

「たまには男2人でちよつと話でもせえへんか？」

「別に構わないけど、何故急に？」

「いや、俺が一般人の癖におかしな所があるの気になってそうやったからな、俺の過去のお話聞かせたる、しかも無料でな。」

「それは珍しいな、お前から話すなんて。」

士郎はそう思った。

自分もそうだが、洋介は何かと謎が多い。

高い身体能力に剣術と体術の心得を持ち、その他にも冷静な判断力に観察眼まで備わっている。魔術回路は本人も自覚がなかったようだが、一般人では破格の量を持っている。気になる事は山ほどあったのだ。

「俺だけが士郎の事知ってるのもフェアじゃないやろ？？」

「それもそうだな。」

士郎は気になる事がわかるという事もあり、軽く返事をした。その様子をみて早速話を始める。

「俺にはな生みの親がおらんね」

「士郎、クローン技術は知ってるか？」

「ああ、詳しくは知らないが勿論知っている。」

「その技術で作られたのが俺や。」

「なっ！！そんなもの倫理的な問題がある！！」

「確かにそうや、でもみんながみんなそうすると思うか？…それは違う。研究者って奴は自分がやりたい事には危険を省みいひん奴もおる。」

ヒトのクローンはいまだ成功していないとする考えが一般的ではあるが、公にされることなくすでに作成されている可能性を完全に否定することはできない。

「失敗作もようさん出来たらしいわ。でもその中でも成功した奴はおった。でな、その研究者はそれで満足せえへんかった。次はな

優秀ないや、完璧なクローンを作り出す研究をしようた。」

士郎は眉を顰めながら黙って話を聞いている。

「その結果生まれたのが俺や、現代の技術では限界があつたんかわからんねんけどな、俺は満足いく作品じゃあなくてな、失敗作の処理係にされたわ。いらんって言われた奴らは全員殺してやった。」

士郎はこの話を聞いて疑問に思った。

何故、こうも彼は何事もなかったかのように話すのか、まるで自分が無関係だったように話している。

「洋介は辛くなかったのか？」

「まあ俺も最初は辛かったかしらん。でもそんな余計な感情はあつこでは邪魔やつた、素直に従わな俺が処理されてたかしらんかな。俺が生きるためにはな。それとも俺の心が壊れたんか、空っぽやつたんかしらんけどな。」

士郎は何かを感じた。しかし、その感じ取ったモノが何か自分自身でもわからなかった。

洋介は話を進める。

「で、自分がそんな事続けて、段々と日数と時間の感覚が失せてきた頃にある事が起きた。」

「ある事？」

「そや、その事件で俺と師匠が会っくんや。師匠はある所の依頼で研究所の破壊をしにきたんや、その時に会ってひと悶着あつてな、ついてく事になったんや。」

その後は剣術教わって、師匠の仕事のお手伝いしつつ、自由気ままな生活ってワケ。ちなみに今まで仕事で善良な市民になんかしたとかは無いから安心してくれ。」

ここで一度、間をあげ「ご質問は？」と士郎に問いかける。

「じゃあ二つ質問だ。」

「どうぞ。」

「そんな話しづらい酷い過去を俺に何で話すんだ？本当にさっき言っただけの理由で話してくれたのか？」

「そうやで。何回も言うけど、フェアじゃないやろ？それに俺は過去の事は別に引きずってへん、俺の考え方やけど過去を引きずっても何も得られへんからな。」

士郎は洋介の心は壊れていると感じた。それは自分自身も壊れているからこそ感じ取ったモノだった。

「そうか……もう一つの質問だ。洋介はあとどれくらい生きられるんだ？」

「さすがやな士郎。気付いたか。思ってる通り俺の体はもう長くない。この年まで生きてるのは奇跡らしいからな、いつオネンネするかわからんわ。」

士郎の最後の質問は洋介の体の事だ。

この技術を人間に適用するのは、倫理的な問題以前に技術的な問題があるとされている。人間が一生で細胞分裂する数が決まっている。クローン体は一生で細胞分裂する数が少ない。つまり、寿命が短いのだ。しかも洋介は異常な身体能力と高い知能を得る為に多少の無茶はされた筈だから尚更だ。

士郎は難しい顔をして考え込んでいる。

おそらく自分をどうにかして助けられないか考えているのだ。流石は正義の味方だと思う。

「士郎、俺の事は気にすんな、俺は答えを見つけるまでは死なへん。」

「答え？」

「つつい喋りすぎてもうたな。これはまだ内緒や。」

「その時はちゃんと話してくれよ。」

「その時はスイーツ5種類は用意して置くように!!」

「なんでさ」

最後の最後でシリアスな空気ブチ壊しである。

こうして2人の夜は過ぎ去った。

第7話 過去（後書き）

もうちよっとしたらオリジナルを入れていこうと思います。

上手くかけるか不安ですがガンバります！

第8話 ホテル・アグスタ（前書き）

少し更新遅くなりました。

やっと完成しました、どうぞー！！

第8話 ホテル・アグスタ

三日後、はやてが洋介、士郎、隊長陣にフォワード陣を召集しへリに乗っていた。

「ほんなら改めて、此処までの流れと今日の任務のおさらいや。これまで謎やったガジェット・ドローンの製作者およびリックの収集者は現状ではこの男」

はやてがそう言うのとパネルを叩く音が聞こえ画像が出た。

「ジェイル・スカリエッティ。生態関係の違法研究で指名手配されているわ。」

説明を受け継いだのはフェイト。

「こっちの調査は主に私が進めるんだけど、皆も一応憶えておいてね」

洋介達は配られた資料に目を通す。資料を読むと犯罪者ではなかったらまさしく天才と呼ぶにふさわしい研究者だろう。

恐らくこの男と「レリック」には何か関連性があるとみて、六課はスカリエッティの行方を追うみたいだ。

「今回の任務はホテル・アグスタの警備です。」

「アグスタには骨董品オークションがあつて中には貴重なロストギアの護衛、及びオークションの参加者の安全の確保が目的だよ。」

「はい!!」

なのはの声に元気よく返事をするフォワードメンバー。

「所で俺と士郎はどないするんや？」

「洋介君と士郎君も私たちと一緒に中の警備だよ。」

なのはがそういうとへりは目的地に着いたみたいだ。

ホテルの中の警備は洋介、士郎、なのは、フェイト、はやての5人、ホテル周辺にはシグナム、ヴィーダ、フォワード陣が警備にあたる。

「かたつ 苦しい格好はあんま好きやないねんけどな。」

「仕事だからな、仕方ないさ。」

2人は今スーツ姿である。黒のスーツを見事に着こなしており、2人とも絵になっていた。

「おそくなってゴメン。」

なのはの声が聞こえ2人は振り返った。

そこには綺麗なドレスを着飾った三人がいた。

「三人とも綺麗やで。」

（これはヤバイ。今晚の夜のおかずは決定や！！）

「ああ、三人とも良く似合ってるよ。」

洋介の脳内はともかく、2人は素直な感想を述べる。

「ありがたい／＼／＼」

三人は頬を真っ赤にする。はやてはなんとか返事を返し、フェイトとなのはは恥ずかしいのか「あう」とか言っている。

三人は普段と違う服装の洋介と士郎にドキドキしていたのは内緒の話だ。

すぐに歩き始めるが、フェイトがバランスを崩して倒れそうになるが、士郎がとつさにフェイトを抱きかかえる。

「大丈夫か？」

「…うん／＼／」

フェイトは抱きかかえられたという理由からまた顔を赤く染める。

（士郎の奴にフラグ乱立されてしまう！！俺にもなんかフラグをリリース！！）

変な心配をする洋介だった。

ホテル・アグスタ付近の郊外にある森でローブのようなものを羽織っている男性『ゼスト・グランガイツ』と隣にいる紫の髪にキャロのデバイスのケリユケイオンと同型のデバイスを持った少女『ルーテシア・アルピーノ』が話していた。

「あそこか……お前の探し物は……此処にはないのだろうか？」

「……………」

ルーテシアはゼストの問いには答えずにただ、ゼストのローブの裾を握っているだけだった。

「何か気になるのか？」

ゼストの問いにルーテシアは黙ってうなずく。

そこに昆虫が飛ぶ音になる。ルーテシアが人差し指を出すとそこに止まったのは機械昆虫のようなものだった。

「……ドクターの玩具が、近づいてきてるって……」

それから少し経ってシャマルのデバイスのクラールヴィントが何かに反応する。反応の正体はガジェット・ドローンの群れだった。

「クラールヴィントのセンサーに反応……………シャーリー！」

『はい！着ました、陸戦型ガジェット・ドローン1型35機！陸戦型ガジェット・ドローン3型4機です！』

そのことを聞いたシグナム、ヴィータ、ザフィーラ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロはそれぞれ副隊長の指示に従って行動を始める。シャマルは現場の指揮を務めることになった。はやて達は会場にいる人達の誘導にまわり、洋介と士郎はガジェットの殲滅へと向かう。

「士郎っ！さっさと終わらすで！」

洋介が声をあげる。手には出展品である刀を持っていた。士郎に何か武器を投影してもらえばよかったのだが、その刀がとても気になり拝借したのだ。

「わかってる！」

2人はすぐさま駆け出した。

（シグナム！そっちはどないや？）

（数は多いが問題はない！！）

（了解や。じゃあフォワード陣のそこに行くわ！）

洋介と士郎は民間協力が決まった後に念話を教わっていたのだ。

2人はフォワード陣の元へと駆ける。

そのころ、ゼストとルーテシアはガジェットの戦闘を見ているとス
カリエッティから通信が入る。

『ごきげんよう、騎士ゼスト、ルーテシア』

「ごきげんよう……」

「何のようだ……？」

ルーテシアはスカリエッツィにあいさつをして、ゼストは警戒するように喋る。

『冷たいねえ。近くで状況を見ているんだろう？あのホテルにレリックは無さそうなんだが、実験材料として興味深い骨董が1つあるんだ。少し協力してはくれないかね？君たちなら実に造作もないこののはずなんだが？』

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めたはずだ」とゼストは断言する。

『ルーテシアはどうだい？頼まれてはくれないか？』

スカリエッツィは次にルーテシアに聞く。

「…いいよ」

と、ルーテシアは無表情のまま告げる。

『優しいなあ。ありがとう。今度お茶とお菓子でも奢らせてくれ。君のデバイス……アスクレピオスに私の欲しい物のデータを送ったよ……』

「うん。」

そして、ルーテシアが詠唱を始めていた。

そのころ、フォワード陣の4人はシャマルの指示のもと、ガジェットに攻撃をしていた。そこに紫のミッドチルダ式でもベルカ式でもない魔方阵がいくつも出現してそこからガジェットの援軍が召喚される。

「あれって…召喚魔方阵!？」

エリオが驚く。

「召喚ってこんなこともできるの!？」

「すぐれた召喚師は転送魔法のエキスパートでもあるんです」

とスバルの問いにキャラコが冷静に答える。ティアナはクロスミラー

ジユを構えながら指示を出す。

「何でもいいわ……迎撃行くわよ！」

（今までと同じだ。証明すればいい。自分の能力と勇気を証明して……私はそれで……何時だってやってきた）

ティアナはそう思いながらクロスミラージユを構えようとした時にガジェットが次々と矢で破壊されていく。

「すまない、遅くなった。」

「士郎さん！！洋介さん！！」

「エリオ、お喋りは後やで！」

そう言って洋介はガジェットえと強化をかけて駆け出す。

そして、一番近くにいたガジェットを抜刀術で切りつけ、二等分にする。

（やっぱり刀が一番しつくりするわ。それにしても思った通りやな。）

洋介はA M Fの事を考えていた。効果範囲内の魔力結合を解いて魔法を無効化するA A Aランクの高位防御魔法で、フィールド系に分類される。その効果範囲内では攻撃魔法どころか移動系魔法も妨害される。

しかし無効化するのはあくまで魔力の結合であるという考えに至ったワケだ。

洋介はそのままガジェットを切り刻んでいく。

士郎も遠くに居る敵を見事に射抜いていく、フォワードメンバーもそれぞれガジェットに対応しているが有人操作に切り替わり少し苦勞している様子だった。そこにシャマルから通信が入る。

『防衛ライン、もう少し持ちこたえてね。ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから!』

「守ってばかりじゃ行き詰ります!ちゃんと全機落とします!」

『ちよつとティアナ!?!』

「無茶するなよ！」

「士郎さん！！大丈夫です！」

ティアナはそういつとエリオとキャロを引かせるとスバルに指示を出す。

「スバル、クロスシフトA！行くわよ！」

「おうつ！」

スバルはウイングロードで空中を行き来しながらガジェットたちをひきつける。

（証明するんだ）

ティアナは足元に魔方陣を展開してクロスミラージュのカートリッジを4つロードする。足元の魔方陣は強く光る。するとティアナの周りに魔力弾が何個も生成される。

「私は……ランスターの弾丸はちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！」

「クロスミラージュー！」

『yes』

クロスミラージューから電子音が鳴るとティアナは2丁のクロスミラージューを構える。

「クロスファイアー……シュート!!」

ティアナの叫びとともにいくつもの魔力弾がガジェットに向かって行きガジェットを貫いて爆散させて自身もクロスミラージューで魔力弾をガジェットに放つ。しかし、コントロールが利かなくなった魔力弾がまっすぐにスバルの方に向かって行く。近くまで来ていたヴィータもそれを見るが間に合わずにスバルに当たる……

（やっぱりこういう展開になるわけね。はあ、俺はそんなめんどい事はノーサンキューやねんけどな。痛い嫌やな）

洋介はそう考えながら行動に移す。ヴィータか士郎に任せてようと考えていたが念のためと思い行動していて正解だったようだ。

洋介がスバルの目の前に立ちふさがって、無駄な足掻きと知りつつも拝借した刀で魔力弾を切りつける。と魔力弾が切れたのだ。

（この刀ただの骨董品やない。いい刀っていうのはわかってたけど、まさか魔力弾をきれるとはな…どういいうこっちゃ？まあ痛い思いする事はなしになったしえっか。）

洋介が考えていると、そこにヴィータが来る。

「ティアナこの馬鹿野郎！洋介、防いでくれて悪いな」

「それくらいは別にいいで。借りを返しただけやし。」

「無駄やった上に、味方まで撃ってどうすんだよ！！」

ヴィータはティアナに激しく怒鳴る。ティアナは啞然とする。

「あの……ヴィータ副隊長、今のもその…コンビネーションのうちで…」

「ふざける、タコ…！直撃コースだよ今は！」

「違うんです！今のは私がうまくやらなかったから……」

「うるせえバカども！」

スバルはティアナのミスを必死で弁解しようとするがヴィータは何にも聞こうとしない。

「もういいよ。あとは私達だけでやる。ティアナ、スバル、お前らまとめて……すっ込んでろ！！」

（やっぱりこうなるよね）

なんとかガジェットを殲滅した洋介達だった。ホテル・アグスタによる事件の処理の後、六課のメンバーはヘリで機動六課の隊舎に戻る。

その時に洋介は勿論の事、士郎もティアナに対して危ういと思っていた。

第8話 ホテル・アグスタ（後書き）

戦闘シーンがやはり難しい。

もっと勉強します。

ぐだぐだで申し訳ありません。

第9話 歩み寄らない人々（前書き）

ここを書くのは結構苦労しました。

では、どうぞ！！

第9話 歩み寄らない人々

ホテルアグスタから2日後、洋介と士郎はなのは達、隊長陣に呼び出されていた。

「ティアナの事なんだけど…最近なんだか無理してるらしいんだ。」

となのが言う。

「やっぱりそれが。」

士郎が答える。洋介は黙って何か考えてる。

「確かに強くなろうとするのはいい…でもあいつのは度が過ぎてる。」

ヴィータもどこか心配している様子だ。

「でもティアナは俺が思う限り馬鹿じゃない。あの4人の中なら飛び抜けて頭いい。そんな事をするには何か理由があるんじゃないか？」

士郎が的を得た事をいう。

「士郎の言う通りだ。」

ここでシグナムが士郎の質問に答え一つの映像を出す。

「この人はティード・ランスター。ティアナのお兄さんよ。両親は早くに他界してね、彼が面倒を見てたのよ。彼は執務官を希望していてかなり優秀だった。」

「なる程、エリートってヤツか。」

フェイトの説明に洋介が答え、フェイトは話を進める。

「ところがある日、彼がある犯罪者追いかけて、その時に交戦になったの。」

なんとか犯罪者には手傷を負わせたけど、ティードさんは亡くなってしまった。

その後地上本部が犯人を捕まえたけれど、その時に心許ない上官が役立たずだの中傷したの。

ティアナは兄の力が役立たずじゃないというのを証明したいのだと思う。」

「なる程、だから今のティアナは焦っているのか。」

「そうやな。後は今自分が成長しとる実感が持ててないと思うわ。」

士郎が納得し、洋介が思っていることを意見する。

「2人だったらどうする？」

なのはが2人にアドバイスを求める。

「そんなんティアナ自身の問題やろ。誰もが皆壁にぶつかるもんや。」

「でもっ…このままにしてたらティアナや他のフォワードメンバーに取り返しのつかない事が起きるかもしれない…第一ティアナの事はほっとけない。」

洋介の冷たい意見になのはが反論する。皆もそのようだ。洋介はなのはが自分のような二の舞になって欲しくないのだらうと感じた。

「はあゝ士郎。」

「そうだな、まずは無茶をした理由だ。恐らく予想通りだと思うけど聞いた方が良いと思う。」

後、質問だか、そもそもこの訓練はどういう意味があつて、次はこんな風にしていくとかそういう事はフォワードメンバーには言ってるのか？」

士郎が気になる所を聞き出す。

「それは…まだ言つてないよ。」

「ここで俺も言つていたる。まずあんたら話してるか？」

俺は隊長陣とフォワード陣つて感じに別れてるイメージが強い。

忙しいかしらんけど自分の部下とコミュニケーション取るのは必要や。自分らが年上やねんから自ら話合つてお互いをもっと知つき。」

間髪入れずに2人からダメ出しのようなラッシュを食らいやや凹む隊長陣。

「ようは話し合えつて事だ。ヒトつて生き物にはそういう力がある。」

「無知はまだいい。知ろうとすらせえへんのが一番の罪やで。」

「うっわかった。ありがとう士郎君、洋介君」

「大した事じゃないさ。」

「士郎はともかく俺はそんなにええ人やない。自分ラブやから。借りを返しただけや。」

士郎と洋介がそう答え、2人は立ち上がり歩きだすが洋介が足を止める。

「後、あんまり許可なく人の過去を容易く喋るもんちゃうで。自分らも言いたくない過去はあるやろ？」

といい残し隊長陣の元を去っていった。

今洋介と士郎は洋介の部屋で話し合っていた。

「厳しく言い過ぎたかな？」

「そんな事ないやろ。甘ちゃん達にはいい薬や。」

「良薬口に苦しってやつか。」

二人はそんな会話を交わしていた。

「後はティアナか……」

「ああゝ手間がかかる女性陣やな。可愛くなかったらこんな割に合
わん事せえへん。」

洋介が愚痴を零す様子を見て少し笑う土郎。

「なんだかんだ言つて洋介はお人好しだよ。」

「ああゝ土郎には叶わん。後一つこれは警告や、お前は人を見る目
がないわ。」

「どういう意味だ？」

士郎が眉を顰める。過去の話聞いた時もあったが、洋介には何か深い闇があるような気がする士郎だった。

「どついう意味やろうな？それよりティアナの事やる？」

「む、そうだな。」

「話す機会が欲しいな、ちょっと俺が探つとく。今日はもう自由行動うちゅう事で。」

（まあ知ってるから、探る必要はないんやけどな、コミュニケーションシヨンって事にしとくか。）

「わかったよ。」

それから適当に過ごし、夜になった後、洋介はロビーにティアナを除くフォワードメンバーを呼び出した。

「お、来たか。」

「待たせちゃいましたか？」

「大丈夫やスバル。今きたとこや。で早速本題に入るねんけどな、最近ティアナはどない？」

「ティア・・・ですか？」

三人とも自分達の事で話があると思っていたようだ。

「そや、最近なにかティアナに変わったことは？」

三人はうーんと考え込むここでスバルがそつえばと言う、さすがは長年付き合っているパートナーだと思った。

「ティア最近おかしいんですよ。自分は役に立たなかったとか、お荷物だとかそんなことばかり言ってる」

エリオとキャラもその事に心あたりがあるような顔をしている。

周囲への劣等感をやはり持っているようだ、ティアナは自分が非力な存在の凡人とも思っている。

「そんな事ないんやけどな。困ったお嬢様や。俺と士郎も一回話す機会が欲しいねんけど、なんかない？」

「これは内緒ですけど、ティアナさんは朝早くに自主練しているみたいです。」

「ナイス、エリオ！じゃあお兄様が人肌脱いだるわ。こんなサービス滅多にないで。」

「ありがとうございます！！」

「エリオ、礼はいらん。こんな時間にありがとうございます。」

そう言いつつ一番近くにいたスバルの頭を撫でる。

「あう…／／／」

まさかの不意打ちでスバルが赤くなる。風呂あがりのせい、シャ
ンプーの匂いがする。洋介は女の子は何故こんなに良い匂いがする
か不思議だと考えていた…ここで視線を感じエリオとキャラロを見る
と自分達もしてほしそうな視線を送っていた。

「じゃあないな」

そういつて次はエリオとキャラロの頭を撫でる。2人ともご満悦な様
子だ。何度かエリオとキャラロは頭を撫でているが、撫でる癖がつい
たと思った。

フワードメンバーを返した後、洋介は士郎に早朝に練習している
事を伝え、明日話す事にし、眠りについた。

翌日の早朝、洋介と士郎はティアナが自主練しているという場所へ
行く。するとそこにはティアナが擦り傷やアザだらけで一人黙々と
練習をしていた。いつも二人で行っていると聞いていたが、どうや
らスバルが気を利かしてくれたみたいだ。その時に一人の男を見つ
ける。

「おう、洋介に士郎の旦那、おはよう。」

「ヴァイスか。おはよう。」

男の名はヴァイス。六課ではヘリのパイロットをしている。洋介と士郎がフォワード陣のメンバーに紹介した後、ヴァイスと出会った。

「それにしてもどないしたんや？こんな朝早くに？」

「それを言つつならお前もだ洋介。こんな朝早くからお疲れ様だ。」

そう言っているとヴァイスは渋顔になり、

「ティアナに忠告したが…、効果はなさそうだ。」

「そうか…。」

士郎が短く答える。ヴァイスもティアナが心配なのだろう。

「ここは士郎に任せるわ。お前の方が向いてそうやし。俺はヴァイスと世間話でもしとくわ。」

「わかった。」

士郎はティアナの元へとむかう。

「ティアナ、何をやっている。」

「士郎さん……。何をとは見て分かりませんか？」

ティアナは士郎に言うと、ティアナは自主練を続けようとした。

「もういいだろう、これ以上やれば体が持たない。」

「平気です。私は凡人なんで誰よりも練習しなくちゃならないんです。」

やはり自分が凡人だと思っている。どうしても自分を卑下するのかと思う士郎。

「確かに俺も才能がなかったからそれは良くわかる。だがティアナは才能がある。」

「私に才能…そんなことはありません!!」

私が凡人じゃない？私を心配して見に来てくれたヴァイス陸曹もそんな感じのことを言っていた気がする。スバルやエリオのような才能もない、キャラのようなレアスキルもない私が？

「ティアナには広い視野と高い指揮能力がある。戦い方によってはスバル達にも勝てるしな。」

「本当ですか！！」

「ああ本当だ。そもそも、ティアナが本当にお荷物だとしたら六課に呼ばれているのか？」

「それは…」

「ティアナの力が六課には必要だ。なのはにも聞いてみる訓練の意味を。今は焦らず着実に実力をつけていけ。くれぐれも無理はするんじゃないぞ。」

「私は…」

士郎はそう言って去っていった。

「どないやった？」

「なんとも言えないな。何もなければいいんだが…」

2人はそう願うばかりだった。

数日後。今日の訓練はスターズとライトニングでの実戦訓練だ。もちろん相手はなのはだ。しかし、その後もなのはとティアナは互い歩み寄らず、なのは対スバル、ティアナコンビの模擬戦の日がきてしまった。

「さーで、それじゃあ午前中のまとめ、2on1の模擬戦やるよ！」

なのはが訓練の締めとして模擬戦にて見極めをしようというらしい。

「まずはスターズからやろうか？バリアジャケット準備して！」

「はい！」

ティアナとスバルは元気よく返事をする。

「エリオとキャラはあたしと見学だ」

「はい」

ヴィータはエリオとキャラを連れて戦闘区域を離れるため、近くの廃ビルの屋上へ向かった。

ティアナとスバルはバリアジャケットを展開し、戦闘準備をする。

二人は早朝自主練の成果をなのはに見せるためお互い気合をいれる。

その頃、洋介と士郎とフェイトはシュミレーター室へと向かっていった。

そして、擬似空間の廃ビルの屋上へたどり着き、扉を開けると、そこにはシグナム、ヴィータ、エリオ、キャラがいた。

「ああ、もう模擬戦始まっちゃってる？」

ビルの屋上に着いたフェイトと洋介と士郎に挨拶をするエリオとキヤロ。

ヴィータはフェイト達を見て、現在の進捗状況を伝える。

「……ホントはスターズの模擬戦も引き受けようと思ってたんだけどね」

フェイトは模擬戦を行おうとしているなのはを心配そうに見る。

「ああ。なのはもココ最近訓練密度が高いからな。…少し休ませねーと」

ヴィータも最近のなのはのオーバーワークは気になっていたようだ。シグナムも険しい顔でなのはを見ている。

「なのは、部屋に戻ってからずっとモニタに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形見たり」

「なのはさん…訓練中も、いつも僕達のこと見ていてくれてるんですよね…」

エリオは普段の訓練でのなのはの心配りを感慨深げに語る。

「ほんとに…ずっと…」

キヤロもエリオに賛同するように嬉しそうになのはを見る。ヴィータはそんな二人を微笑みながら見つめる。

しかし洋介と士郎は顔をしかめっ面のまま黙って見ている。

「おっ、クロスシフトだな」

ヴィータがティアナの戦闘陣形を見てつぶやいた。ティアナは周囲に10個程の魔法弾を展開している。

「クロスファイアシュート！」

ティアナは魔法弾をなのはに向けて発射する。だが、その魔法弾はスピードが遅い。

「…？なんかキレがねーな？」

ヴィータはティアナのクロスファイアにいつもの勢いが無いことに疑問を抱く。

「コントロールはいいみたいだが？」

シグナムは正確なコントロールに目をやるが、それでもヴィータは釈然としないようだ。

「いや、それにしたって…」

クロスファイアは、飛んで回避するのはの後ろを追尾し続ける。すると、なのはの前にスバルのウィングロードが展開しその上にはスバルがなのはに向けて近づいていた。なのはは迫り来るスバルを確認する。

「フェイクじゃない、本物!？」

なのはは即座に魔法弾を展開し前方のスバルに向けて発射する。スバルは飛んでくる魔法弾をシールドで防御し突進をする。何個かのスフィアはスバルのシールドを突破し、スバルの体をかすっていく。そして、全ての魔法弾を捌ききると、スバルはなのは目掛けてリボルバーナックルを振り下ろす。

「うおりゃあああっ!！」

なのはは咄嗟にレイジングハートでシールドを展開しスバルのリボルバーナックルを防御する。スバルは力押しでなのはのシールドを破ろうとしている。なのははスバルの無茶な突進に顔を顰める。すると、なのははレイジングハートを振り、スバルを弾き飛ばす。

「きゃあぁっ!?!」

吹き飛ばされたスバルはなんとかウィングロードの上に着地する。

「こらスバル!ダメだよ、そんな危ない軌道!」

なのははスバルを叱りながら、ティアナのクロスファイアをよけ続ける。

「すみません!でも、ちゃんと防ぎますから!」

なのはは怪訝な顔をする。

なのはは周囲を見渡す。すると、別の廃ビルの屋上で光の反射を確認した。そこには、ティアナが砲撃準備し、しっかりなのはをロックしていた。

「砲撃？ティアナが！？」

フェイトは驚いている。当然だ、ティアナは普段の訓練では砲撃などしていないし、教えていない。

（特訓成果、クロスシフトC！行くわよ！スバル！！）

（おう！！）

ティアナの合図と同時にリボルバーナックルがカートリッジをロードし、マツハキヤリバーがうねりを上げる。そして、マツハキヤリバーの突進力で一気になのはとの距離を詰めるスバルは、リボルバーナックルを振り上げなのは目掛けて体ごと突撃。

なのはは魔法弾を展開するが、スバルは全て避け、拳の届く距離まで近づき、リボルバーナックルを振り下ろした。だが、なのはもレイジングハートでシールドを展開しリボルバーナックルの攻撃を防ぐ。

ナックルスピナーの回転が上がるが、シールドが突破できない。スバルは必死になのはに喰らいつく。なのははスバルの攻撃を防御しつつ、ティアナの方を見る。すると、砲撃準備をしていたティアナはその場から消えてしまった。

「あっちのティアナさんは幻影!？」

「本物は!？」

キヤロとエリオが慌てている。洋介と士郎、隊長陣は冷静に見守っている。

ティアナはなのはの頭上に展開されたウィングロードを走っていた。

（バリアを切り裂いて、フィールドを突き抜ける!）

ティアナの持つクロスミラージュの銃口部分から魔力の刃が現れた。そして、その刃をなのはに向けて飛び込む。

「一撃必殺!!」

自分を省みない危険行動と、慣れない魔法。そんなティアナ達にとうとうなのはがキレた。

「レイジングハート、モードリリース」

『all right.』

レイジングハートはマスターの言葉に従い、待機モードへ移行した。

「だあああつ!!」

ティアナの掛け声と共になのは達のいた場所は爆発し爆煙に包まれた。衝撃波が、離れて見ていた洋介たちにも襲い掛かる。

「な、なのは!？」

フェイトはなのはの安否を心配する。おそらく、まともに喰らっていたらただでは済まないだろう。

しばらくして、煙が晴れ、現場の状態が見え始めた時、フェイト達は驚いた。

「…おかしいな…二人とも…どうしちゃったのかな？」

なのはに対峙しているスバルやティアナも驚いた。左手でスバルのリボルバーナックルを受け止め、

右手でティアナのクロスミラージユのダガー部分を掴んでいる。

「がんばってるのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ」

なのはは静かに語りだす。しかし、二人とは目を合わせず淡々と怒りを表す。

「練習の時だけ言うこと聞いている振りで、本番でこんな危険な無茶するんじゃない？あ、練習の意味…ないじゃない？」

フェイト達が驚いた中、士郎が危険を感じて部屋をあとにする。あの騒ぎのせいで士郎が出て行ったことは洋介以外、気付いていなかった。

（正義の味方はご立派な事で…救いようの無い奴らに俺はそんな真似、出来ひんわ。）

洋介は士郎の行動を見ながら、そう思っていた。

クロスミラージユのダガー部分を素手で掴んでいるため、なのはの手からは血があふれ出ている。

ティアナはその血を見て恐怖する。訓練とはいえ、仲間を、傷つけてしまった。

「ちゃんとさ…練習どおりやろうよ。ねえ？」

スバルはなのはの怒りに震え、まともに喋れない。

「私の言ってること…私の訓練…そんなに間違ってる…？」

なのははティアナを見上げる。ティアナはなのはと目を合わせるこ
とが出来ず、クロスミラージュのダガーを解除し、なのはと距離を
とる。そして、体制を立て直し、クロスミラージュを構え、カート
リッジをロードする。すると、ティアナの前に魔方阵が展開し、砲
撃準備を行う。

「私は！もう…誰も傷つけないから！！無くしたくないから！
！」

ティアナは涙を流し自分の思いをぶつける。そんな独白にスバルは
ただ見ているしかなく、立ち尽くしていた。

「だから…だから！強くなりたいんです！！」

「少し…頭、冷やそ…」

なのはの足元に魔方阵が展開し指先に魔力が集まりだす。

「クロスファイア」

なのはは静かに魔法を唱え、

「うわああ！！ファントムブ…」

ティアナが必殺の砲撃魔法を言い終わる前に、

「シュート。」

なのははクロスファイアをティアナ目掛けて発射した。そして、クロスファイアはティアナに被弾し、爆発した。

「ティア…！？バインド！？」

スバルはティアナの所へ駆け寄ろうとしたが、いつの間にかバインドで拘束されていた。スバルはなのはを見るが、なのははティアナから視線を離さない。そして、なのはが無常の言葉を告げる。

「じつとして…よく見てなさい」

煙の晴れた中に、フラフラのティアナがいた。今にも倒れそうだが、そして、なのはは二発目のクロスファイアをティアナに向けた。

「なのはさん!？」

スバルの悲痛な叫びも空しくなのはの指先からクロスファイアが発射された。そして、ティアナに被弾し爆発した。

煙が晴れた頃にはそこには士郎が立っていた。

「間に合った…」

「士郎……さん？」

ティアナはボロボロで立っているのがやっとなかった。

「今はゆっくり寝てろ。」

そう士郎が言うとティアナは意識を手放して倒れた。士郎はティアナをお姫様抱っこをする。

「なのは、なぜこのような真似を？」

士郎には分からない。なのはの態度の豹変ぶりに。確かにティアナが行った行動は絶対にやってはいけないことだ。しかし、なのはの行動はもはや教導ではない。

「どづいつことかな……？」

「分からないのか？お前がしている事はただの八つ当たりだ。」

士郎の口調が赤き弓兵に変わる。

「士郎君も邪魔を、するのかな……？」

士郎はなのはを無視し、スバルを助け、ティアナをスバルに預ける。

「…スバル、ティアナを頼む。そして避難しろ。」

「わ、わかりました。」

士郎はスバルにティアナを預け、スバルを退避させた。なのははレイジングハートを士郎に向けて構えていた。

「今のなのはじゃまともな話は出来そうにないな。しばらく眠るといい……」

士郎の目つきがあゝの鷹の目の様になりなのはを見据えていた。

その頃シュミレーター室ではこの展開に焦っていた。

「あいつ……なにしてんだ!？」

「あんたらの尻拭いってやつちゃうか？」

ヴィータの焦る声に洋介が反応する。しかし洋介の様子がいつもと違っていた。いつものふざけた様子ではない。ただ無表情のまま冷たい眼差しだった。この洋介の豹変振りに驚くしかなかった。

「どういう意味だ？」

シグナムが険悪な顔になりながらも疑問をぶつける。

「そのまんまの意味や。」

「だからどういう意味なんだよっ!!」

洋介の態度にヴィータがキレた。しかし洋介は表情一つ変えない。

「ほんま救いようがない奴らやな。あれから誰か話し合ったか？お互いに知ろうとしたんか？それが出来てないからこのザマなんやろ？」

「そ…それは…」

洋介の言葉にフェイトが言葉を濁す。

「あんたら心配してる割には行動に移す事はせえへんのか？もしかしてなんもせんでも伝わってる？」

ホンマに綺麗事言うのだけは一人前みたいやな。……イライラするわ。」

皆が沈黙する。洋介の言ってる事が正論過ぎるのだ、返す言葉もない。さらに洋介は話を続ける。

「まあ所詮人間はそんなもんや。交わろうとせえへん、……まるで空と大地とみたいやな。……まあ俺にとってはそんなもんでもいい事やけど。」

洋介の言葉が部屋に響き渡り洋介は部屋を後にした。部屋に残っていたのは沈黙だけだった。

そして、洋介が退室した後、2人の戦いが始まった。

第9話 歩み寄らない人々（後書き）

うーん。難しいですね。

こんな感じになりましたが如何でしょうか？

主人公は元からこういう感じにする予定でした。不快に感じてしまつたら申し訳ないです。

感想待ってます。

第10話 追突の果てに（前書き）

更新長らく出来ず申し訳ありません。

仕事の事情で海外へいつておりました。

なんのお知らせもなく申し訳ありませんでした。

お待たせしたお話をどうぞ。

第10話 追突の果てに

なのははディバインシューターを20個展開し、士郎に向かって発射する。

「同調開始 トレース・オン」

士郎はすぐさま夫婦剣、干将・莫耶を投影し身体強化をかけて、魔力弾をかわしたり、切り落としていく。

「さすがだね…これはどうかな？」

なのははディバインシューターを50個も展開し、士郎へと発射した。

「数が多いな…」

士郎はそう言って顔を顰めるが、なんとか捌ききる、そしてすべての魔力弾を切り落とした。

しかし、その間に相当な魔力を収束し、砲撃準備が整ったのはがいた。

「デイベイン…」「ちっ… I a m t h e b o n e o f m
y s w o r d 《体は剣で出来ている》」

「バスターー！！」

「熾天覆う七つの円環！！」
ローアイアス

膨大な魔力の奔流が士郎に襲いかかった。

だが士郎の展開したのは自身の中での最強の盾である。

七枚の花弁が魔力の奔流を受け止める。花弁の一枚目が散り、2枚
目がヒビが入った所でなのはの攻撃が終わる。

「なっ！？」

なのはの顔が驚愕の色に変わる。自分は手加減等していない。むしろかなりの魔力を込めて放ったのだ。なのに対する彼は無傷という結果だったのだ。

「今の君には教導などする資格はない。」

士郎はさらに心の揺さぶりをかける為の言葉を出しながら、干将・莫耶を投擲する。そしてなのははレイジングハートで払おうとするが……

「壊れた幻想 ブロークンファンタズム」

夫婦剣が爆発を起こす。

いつものなのはならこんな行動はしなかっただろう。

ましてや一度シグナムとの戦いで見せていたのだ。彼女はそれほどに怒り、冷静ではなかった。

レイジングハートが自動でプロテクションを展開する。

しかし、士郎は爆風があがった直後に背後に回り、首筋に手刀をあてなのはを気絶させた。

なんともあつけない幕引きで士郎の圧勝に終わった。

医務室に運ばれたのはとティアナ。そこには先程の成り行きを見届けたメンバー達がいた。その中には洋介の姿もあった。しかし、そこには重い空気が漂っていた。

「二人の様子はどうなの？」

「大丈夫よ。二人とも心配ないわ。直に目を覚ますと思う。」

フェイトはシャルルの答えを聞いて安堵の色を見せる。

「お疲れさんやな。隊長様たちには俺がそれなりに言っただけ」

「なに、大した事じゃないさ。洋介の方こそ大変だっただろう。」

洋介と士郎はなんともないような顔で会話を交わす。
だが会話の内容が先程の事なので周りの空気は当然よくならない。

「済まなかった。」

そんな空気の中、唐突にシグナムが謝りだす。

「俺にはどうでもいい事って言うてるやろ。それよりどないするつもり？」

洋介の棘のある言葉に隊長陣は困ったような顔をする。

まるで捨てられた子犬のような顔をしてどうすればよいのかわからない様子だった。

その態度が洋介には余計に腹立たしい事だった。

「それこそ俺にはどうでもいい事か……」

そう言い残し部屋を後にした。

そして重い空気のまま時間だけが過ぎていくこうとする中で士郎は洋介を追いかけに行った。

「ここにいたのか。」

士郎が洋介を見つけたのは屋上だった。

「なんや、どないしたんや？」

「少し真面目な所もあるんだと思ってさ。」

「酷い言い種やな。」

先程のことが無かったかのような会話で2人は話していた。

やや沈黙があつてから洋介が口を動かし始める。

「ああいうの見てるとイライラしてもうてなあ……。まあどうでもいいねんけどな。」

士郎は洋介という人物が余計にわからなくなった。先日あのようなアドバースをするときながら、今は心の底からどうでもいいと言っている。

熱い男かと思えば冷めた所をみせる、不思議な男だと思った。

洋介は士郎の心情がわかったかのように喋り出す。

「不思議なやつやと思ってるやろ？俺はただの暇つぶしでやってる

からな。あれがただのオッサンやったら殺してたわ。」

その言葉を発する表情は笑顔だが瞳は無機物のような物になっており、士郎は悪寒が走った。

「何カタイ顔してんねん。冗談や。」

「ああ。そうだよな。」

「また後でお姫様達の面倒みなアカンねんからしっかりしいや。」

先程の無機物のような瞳は無くなりいつもの瞳に戻っていた。

士郎は自分に勘違いだといいい聞かせることにし、2人は部屋へと戻っていった。

第10話 追突の果てに（後書き）

久々の更新でスランプを感じました。

なかなか危ない状況ですね。

頑張って更新致しますので宜しくお願いします。

第11話 雨降って地固まる（前書き）

今回もめちゃくちゃになりました。

自分で何を書いているのかわからない状態です。

もっと勉強せねば……。汗

第11話 雨降って地固まる

私はただ認めてもらいたかった。自分の力はこんなものではないと。兄さんは役立たずではないと証明するために…。

「んっ……ここは…？」

「目が覚めたのね。あなたは、訓練中に撃墜されて気を失っていたのよ。」

シャマルの言葉により自分が訓練中に何があったのかを思い出し、ティアナは苦虫を潰した様な顔をする。

「何があったか思い出したようね。高町教導官はもう目が覚めてるわ。あなたが目が覚めたらロビーに集まるようにと。」

「わかりました。」

ティアナとシャマルは黙々と廊下を歩いている、寧ろ、そうするしかないような感じだった。お互いに気まずさを感じている所でロビーに到着する。……が空気が重い。

いや重いのは勿論なのだがそれよりも冷たさが感じられる。

それが感じられるのはあの二人。

士郎と洋介だ。

あの出来事の詳細は気絶してしまったティアナにはわからない事だが、あの洋介の様子とその他のメンバーの沈黙から大体は察しがついたようだ。

ロビーのメンバーがこちらに気づいたようなので2人は少し早足で駆けつける。

「体は大丈夫か？」

「はっ、はい。大丈夫です。」

士郎は先程の冷たさは全く感じられる様子はなく、本当に心配した様子だった。

その突然の変化にティアナもたどしく応えてしまう。

「なら良かった。早速で悪いが話をさせて貰おうか。」

士郎は先程の様子など蚊ほど見せずすぐに無表情に戻し、話を切り出した。

洋介を除くみんながこの変化にはついてこれず心臓に悪いと言うような表情だ。

「さて、早速だが隊長の方々は何故あれから話し合おうとしなかった？」

「それは……ごめんなさい。」

士郎の質問になのは先日と同じような言葉しか出ない。勿論、他の隊長達も同じである。

元々優秀なメンバーが集まっている六課。能力的には優秀かもしれないが、心の方までは優秀とはいかなかったようだ。

「君たちに少し厳しい事を言わせて貰うよ。洋介の言葉を借りるが、君達は甘い。」

隊長達は普段は優しい士郎の言葉にショックを受けている。

「今回は訓練だったがこのままでいけば、間違い無く誰かが……死ぬ。」

フォワードメンバーは死という言葉にビクリと反応を見せ、隊長メンバーはなのはの悲劇を思い出してか辛い顔をしている。

ここにいるメンバーのほとんどは残酷な現場や、人を殺した所、殺された所など見たこともないのだろう。

「理想をうんぬん語るんやったら、それを理想から現実近づける努力をせなあかん。」

何もせんでもわかってもらえてると思うのはあんたらの勝手な認識や。

あんたらのミスで誰かが死ぬかしらん、そんな現実があるのに見向きもせえへん…それは悪やで、管理局さん。」

人という生き物は言葉というツールがありながら、それを使い、伝える事を酷く苦手としている。今回の場合は、嫌な過去を蘇らせ、語るのを拒んでいるからだ。

今ままで沈黙を保っていた洋介が土郎の言葉に乗る。しかし、土郎もいささか冷たいが、それよりも刺々しい言葉だ。

「洋介、少し言い過ぎだぞ。」

「スマン、スマン。もう言わんから。隊長さんらも懲りたみたいやしな。」

悪とまで言われて、隊長陣は自分の不甲斐なさに齒を食いしばっている。

「あんま言葉にはしてないけど、自分らがなにをすべきかはわかった？」

「わかったよ。」

なのはは洋介の言葉に深く頷いた。フェイト達も理解している様子。士郎も安心した表情だ。

「じゃあオッケー。次はティアナ。」

「……はい。」

ティアナは先程の話を聞いて真剣に反省しているようだ、そのための声のトーンが小さい。

「大体反省はしてると思うけど一言いわせてもらっな。ムチャする
なとは言わん、やけど自分をもっと大切にしいや。出来るな？」

「はい！」

「いい子や。」

洋介はそういつてティアナの頭を優しく撫でる。その手は暖かかった。

ティアナは顔をやや紅潮させ気持ち良さそうに目を細める。

「…なんだか兄さんみたい。」

「じゃあみんなは明日にでもみんなで話し合うようにしてくれ。」

ボソツと呟くと同時に士郎が念の為に釘を刺すように言った。

「何か民間協力者の俺らがしゃしゃり出過ぎたかしらんけど勘弁
してや。」

「そんな事ないよ。本当に有難う。」

フェイトは本当に感謝しているようで、にこやかだ。

当事者のなのはとティアナはまだぎこちないがこのままいけば解決されていくと誰もが思っていた…。

突如、警報のアラームが鳴り響く。

（完全に忘れとったわ。 まあ大丈夫かな？ あれだけ言っただし。 いやありえそつやな…。）

洋介はここで終わりじゃないと思った。

「敵襲!？」

全員はすぐさまヘリポートに集合していた。

ガジェットドローン？の強襲型がやって来た。 恐らく新型のデータ取りとこちらの戦力の調査といった所だろう。

今回はなのは、フェイト、ヴィータの三人で撃破であたる。

他のメンバーは待機ということになった。

「じゃあシグナムそっちは任せたよ。」

「ああ、任せておけ。」

フェイトとシグナムがお互いに会話を済ませ、なのはティアナに話し出そうとするが、ぎこちなさは、やはり抜けてはいなかった。

「ティアナ、今回は待機メンバーから外れておこうか。」

なのはの判断は間違っではない。魔力、体力ともに万全ではないからだ。ヴィータもそれに賛同する。

「言うこと聞けないのは使えないって事ですか…」

「自分で言っでてわからない？ 当たり前前の事だよそれ。」

先ほどの会話の反省などすっかり忘れ、2人はヒートアップしている。このままいくと宜しくない事が起きるのは目に見えている。

限界がきたシグナムだったが、ここで背後が大きなプレッシャーを

感じ、振り返る。

「ホンマある意味、期待を裏切らんな。」

「「っ！」」

洋介である。

熱くなる2人もこのプレッシャーに気付き、何が起こったかわからない様子である。それには他のメンバーも気付いた。いや、気付かされたのだ。プレッシャーには躊躇いが無かったのだ。

いつもふざけていて、ニコニコしている男がこのような表情を見せたのだ、それは思った以上に皆を注目させるには充分過ぎた。

洋介は女性に対して敵でなければ余程の事がない限りそんな事はしない。。つまり怒っている。そういうことなのだ。

「ヴァイスさつさといけ。しつこいのは好きやないねん。」

「っ了解。」

「ティアナ今は思い詰めちゃっているけど、戻ってきたらゆっくり

話そう。」

「なのはさっさといくぞ！」

ヴィータが素早くなのはを押してへりに乗せ、ヴァイスは洋介の氣迫に押され素早く発進する。

「ティアナ、お前なにしてんねん。」

洋介は威圧感がある言葉で、ティアナは言葉を発せない。

「あの！命令違反は絶対ダメだし、さっきのティアの物言いとか、それを止められなかった私は確かにダメだったと思います。

だけど！自分なりに強くなるうとするのとか！

キツイ状況でもなんとかしようと思ってるのって、そんなにいけないことなんですか！？」

自分なりの努力とか、そういうことも、やっちゃいけないんですか！？」

スバルは恐怖感を抱きながらも、洋介を真っ直ぐみて、ティアナの思いを代弁する。

「さっきも言ったけど、無茶をするとは言わんけど、自分は大切

にしろっていったやろ。

…… ああ、めんどくさい、シャーリーおるんやろ？あとは任せた。」

洋介の言葉でヘリポートの階段からシャーリーが現れた。何故自分が居ることに気付いたか疑問に思ったが、状況が状況なので、それを忘れさせていた。

シャーリーは皆をロビーに集めると、昔話をはじめた。まだ幼き一人の少女の話を…。

魔法も知らないただの9歳の少女が、短い期間で過酷な事件に立ち向かい、自分を省みない無茶な魔力行使で疲労が体を蝕み、ボロボロになる姿を。フォワード四人はモニタに映る少女が、危険を無視して戦う姿に目が離せない。

「蓄積された疲労で、なのはさんは怪我をしたの」

モニタには8年前の事件映像が映し出される。アンノウンに攻撃を受け見るも無残な少女の姿がそこにはあった。

「普段のなのはちゃんなら、どうということもなく隊員を助けることができたし、敵を倒すことも出来ていたでしょう。でも、イロイロな要因が重なって、不幸な事故に繋がってしまったの。」

ティアナはこの話を聞いてようやく本当の意味を理解したようだった。

「ティアナ、お前が今進んでいるのがこの道だと思え。俺もこういった経験をしたが周りの人達がどれだけ悲しむか凄く痛感させられた。

本当に口くなものじゃあないぞ。

それがわかったならちゃんと2人で話し合っただぞ？」

士郎の言葉にティアナはコクリと頷いた。

しばらく時間がたつと、非常態勢も解除され、なのは達も帰還してきた。

「ええ！？私の昔の事、話したの！？」

なのはは呆れたような声をだした。

そんななのはに、シャーリーは両の手の平を合わせ、謝る。

「ダメだよ、人の過去勝手に話しちゃ。」

「そうだぜ、おしゃべりはダメだぜ。」

なのはに諷められ、ヴァイスにもダメ出しをもらっシャーリーはただただ頭を下げた。

「ごめんなさい！！でも、見ていられなくって…」

ロビーにはメンバー全員が揃っている、なのははティアナの下へとゆっくりとした足取りで向かう。他のメンバーはその行為を静かに見守るように見ている。

「ティアナ……。こんな上司でごめんなさい。」

「なのはさんっ！私っ、わたし…」

なのはは慈愛に満ちた聖母のように今にも泣き出しそうなティアナを優しくもギュッと抱き締めた。

こんなぶつかり合いは二度とないようにと…。
隊長陣も暖かな目で見守っている。

「ティア、良かった。」

スバルは自分の相棒の憑き物が取れたような表情を見て、涙を堪えながら様子を見守った。

勿論エリオやキャロも一緒だ。同じフオワードメンバーの事だから自分の事のように喜んだ。

洋介と士郎はお互いに何を話すでも無く、静かに屋上へと向かった。

「やっと一件落着やな。」

「そのようだな。」

洋介はいつも通りあっけからんとした様子で、士郎は軽い微笑を浮かばせる。

「洋介済まなかったな。俺がするつもりだったのに。」

「ええよ。士郎もやってたやん。いつの間にか俺が話してばっかやったしな。それにお互いに悪者気取りでええ味でたと思うで。」

「ははっ。一番悪者になっていた君には言われたくないな。」

士郎はお互いにする事が同じだったとは思っていなかった様で、それがおかしく微笑んでいた。

「2人してそんなのズルいよ！」

突然聞こえる怒鳴り声のような叫び声が2人の空間に割って入った。声のする方へと2人が振り返ると、そこには管理局のみんながいた。

「ああ聞いてたんか。」

洋介はそれがどうしたの？という様子だ。

「そんな事されたら、迷惑かけっぱなしで、感謝しても感謝しきれないよ。」

フェイトは皆の気持ちを代弁した。

「こっというのは見捨てておけないんだよ。」

士郎は爽やか笑顔でそれに応える。

その表情を見ると困った事にはなんでも助けるように見えた。

皆が本当にいい人達だと思っている時に洋介の一言が降りかかってきた。

「これはもう貸し借りチャラやる！人命救助もんやでこれ。これでやっとフェアやな！」

エアブレイカーがもれなく発動中である。

「せっかくイイヤツだと思ってたのに……」

「最低です。」

「器が小さい。」

「人としてどうか……。」

次々と飛んでくる言葉の刃。上から、ヴィータ、ティアナ、シグナム、なのはだ。ほかのメンバーも生ゴミを見るような目で見ている。

「照れ隠しやん！っていうか言葉が鋭利なナイフになっとる！後そんな目で見んといて！」

「照れるような人じゃないよね？」

「フェイト、それ微妙に傷つくわっ！」

「これが日常だな。」

「士郎、お前はオッサンか！」

何かと波乱な出来事であったが、機動六課が成長出来る出来事であったともいえるだろう。

今回また一つ絆を深める事が出来た。

第11話 雨降って地固まる（後書き）

改めて書いたのを読み返すとクオリティが低いと感じます。汗

仕事もっと楽になって書くことに集中したい！

読者の方々がのめり込むような作品をもっと勉強して書きたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7290i/>

そんなもの認めない

2010年10月27日21時33分発行